
俺の姉妹達の憂鬱

2次元美少女っしょ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺の姉妹達の憂鬱

【Nコード】

N0458S

【作者名】

2次元美少女っしょ

【あらすじ】

勇一とあらゆる女の子と出会い

けして俺の妹がこんなに可愛いわけがない ではないがオリジナル作品でいろんなアニメ作品がヒロイン等で出てきます

勇一は1年前 1年の時にどんなキャラでも1度は会ってるという設定で

僕が見ている／見ていたアニメをこの作品に入れていく予定です
現在のアニメ けいおん!・とある魔術&科学・オーバー

ラン・俺の妹・IS

バカテス・生徒会の一存・えむえむっ！・まよちき・まどかマギカ・
猫神やおよろず・AB・オオカミさん・など

今期導入アニメ C3 シーキューブ、ベン・トーなど

俺の日常？（前書き）

注意 あらし 悪口等は禁止です

話の中にいろんなアニメ作品がでますから

俺の日常？

「俺の姉妹達の憂鬱」

爽やか朝の日差し、雀達が鳴く青天の霹靂
とある1件の家で：

ドンドンと2階へと上がる足音、そして部屋へと入りベッドで寝ている主人公を起こそうとした。

?? 「朝だよ！いつまで寝ているの」

そう俺の家には姉がいた。しかも美人

勇一「うーん 朝は眠いのが当たり前だろ……」

?? 「もうそんなこと言わず、早く起きない！遅刻するわよ」

勇一「わかったよ、さっさと着替えるよ涙子」

涙子「うむ、よろしい」

おっと自己紹介が遅れたな

俺の名前は天川勇一

この家に住む住人、いたって普通の高校生、健全だからアニメやグッズだって多少は持つてる

そして起こして来たのは天川涙子、俺達姉弟の一人、とっても面倒がよく親に代わって家事やら掃除やらしてくれる

涙子は俺が制服に着替えるため部屋を出て下に行った。俺は制服に着替えカバンと今日の準備を早急にした。そして準備が出来たから朝ご飯を食べるべく1階へ降りた。

?? 「あ！お兄ちゃんおはよう」

勇一「おはよう」

俺はリビングで年下の妹と会った。その子は天川梓、俺の妹だ。髪はツインテールでしかもかなり可愛い

梓「お兄ちゃん、今日の放課後用事ない？」

勇一「放課後？そうだな～ないかもしれないが、それがどうした？」
梓「それは、後でのお楽しみ」

なんだろ 後で話すなら今言えばいいのに
するとリビングのドアから黄髪の子が入って来た。

?? 「涙子ねえ、梓 おはよう」

涙子「おはよう桐乃ちゃん」

梓「おはよう お姉ちゃん」

勇一「おはよう 桐乃」

桐乃「……、気安く話かけんなバカ!」

勇一「うっ!」

桐乃はなぜか俺にだけきつく言う

そう今天川家全員集まった。ここで改めて言うておく

俺の家族は1番の姉 学年は3年の涙子 2番目の姉 桐乃、桐乃
と俺は同じ年で学年はこれもまた同じ2年同士、そして1番下の妹
梓 学年は1年で俺達の後輩、そこで親んだけど親は不明、親
についてはまたの機会に……

こうして朝食を食べ、学校に向かった。

学校の教室へ

勇一「はあ」

?? 「どうした? ため息なんかして」

勇一「ああ 枯渴か、なんかイベント起きないかなって思ってた
んだよ」

枯渴「イベントなんてアニメの話だけだろ!」

そう今話をしているのは俺ダチ本名は唐谷枯渴、まあ似たもん同士
っていうことで……

それから朝の授業を受け、昼飯を食い、午後の授業も受け ついに
放課後

惜しくも雨が降っていた

勇一「あ! そうだ梓にメール 打っておこう」

枯渴「おいおい勇一、雨が降ってるぜ まあ俺は置き傘があるけど
どうする?」

勇一「いいよ 先に帰って 俺、用があるから残るよ」

枯渴「そうか それじゃ」

勇一「また明日」

そう言って俺と枯渴は学校で別れた。ちょうど梓からのメールが来た。内容は

梓（「お兄ちゃん 今から手伝って欲しいから1階の1年4組に来てね PS：遅れたらまじ殺す!!」）

勇一「げ!!! 殺すって…」

でもまだ続きがあった。

梓（「さっきの殺すは脅しだから勘違いしないでね」）

勇一「まったく梓は」

俺は携帯を閉じてポケットに入れ待ち合わせの場所へ行った。

5分後、親は梓に言われた通り1年4組に着き梓と会った。

勇一「梓、それで俺になんか用？」

梓「ふふんっ、実はね」

梓に呼ばれた理由は先生の書類プリント1メートル分の厚さを自分達のクラスの教卓に持って行くことになった。

勇一「呼ばれた理由は持ち運びかよ!」

梓「ごめんね お兄ちゃん、私だけじゃ全部持って行くことは出来ないから」

勇一「たくっ しょうがないな……………なあ梓」

俺は書類プリントを持ったまま梓に話かけた。

梓「何？お兄ちゃん？」

勇一「帰り一緒に帰らない？」

梓「うん、いいよ」

勇一「あと傘 入れてくれない？俺傘持ってきてないんだ」

梓「わかった しょうがないお兄ちゃんのために入れてあげるよ」

俺は一安心した。梓の傘の中さえいれば全身濡れずに帰ることが出来る

勇一「悪いな、梓」

俺と梓は書類プリントを教卓に置いて荷物を持ち、下駄箱に着き外

靴に履き替えた。だがやっぱり雨は降ってる。梓も前に置いていた置き傘を手にとって傘を開き、傘を俺に渡し一緒に帰った。なんか相合い傘だな〜

雨の中俺と梓は面白い話や昨日のことなど帰りながら話した。15分後ようやく家についた。びしょびしょにはならず済んだけど足元や肩半分（俺の場合、左 梓は右）がちよっと濡れた。

勇一「ただいま」

梓「ただいま」

涙子「おかえりー！」

涙子はいつもテンション高かった。まあいつものことだけど、傘を傘立てに入れ家に入った。玄関を見てみると桐乃の靴があった。ということはもう桐乃が帰ってることになる。

涙子「外大変だったね大丈夫？」

勇一「まあなんとか」

梓「これぐらいならドライヤーで乾くよ 私服 着替えてくる」

勇一「じゃ俺はシャワー浴びてくる」

靴を脱ぎ俺と梓は別々に別れた。俺は浴室のドア持ち開いた。

そこにはなんと裸でタオルで頭を拭いている状態で俺の目の前にいて目があった。その子は紫髪にネコミミなんだけどその形がまじネコミミそっくりの地毛

??「おかえりなさい」

勇一「おっ！あゝた、ただいま」

俺の心は死んだ。それは目の前に有り得ない状態だから冷静でいた。すると廊下からこちらに向かう足音が聞こえた。それは桐乃である桐乃「ねえ希 服のことなんだけど……………！！ちよっと何してんの！」

勇一「な…何って何もしてないよ」

桐乃「…………この変態が……！」

勇一「ぐうう……！！」

俺はなぜか桐乃に殴られるハメになった。

なぜ桐乃に殴られるのかなぜ俺の家に女の子がいるのか果たしてその理由は………続く

俺の日常？（後書き）

面白くいただけたでしょうか？

もしよろしければ小説募集の方をお願いします

まだ新人ですけどよろしく

迷い猫? にゃ〜 (前書き)

前回の続きです

また1作品出しました。

迷い猫オーバーランとオオカミさんと七の仲間たち
まだまだ作品出しますのでよろしくお願いします

迷い猫？にゃ〜

「俺の姉妹達の憂鬱」

第2話

天川家食卓、イスが余らない人数でいた。向かいから順に言うとなの子、桐乃、涙子、梓、俺という席でいた。そして前回の続きだが……天川家になぜか女の子がいる。その様子から物語は始まる。

勇一「で！なんでうちに女の子がいるの！？」

俺の激怒の質問に桐乃が答えた。

桐乃「それは、私が連れて来たから」

連れて来ただと！……犬や猫じゃあるまい

涙子「連れて来たってどうこと？」

梓「何か理由でもあるの？」

桐乃は少し暗い表情で話した。

桐乃「実は……さっき公園でこの子が雨の中ずーっと雨に打たれてたから可哀想で……連れて来ちゃった」

涙子「なるほど、桐乃ちゃんは人思いだね」

桐乃「だって可哀想だと思わない！？雨の中ずーっと一人ぼっちみたいだから見てらんなくて、あとこれギャルゲーみたいし」

勇一「ギャルゲーかどうか知らないけど、桐乃は優しいんだね」

桐乃「うっさい！気安く優しくすんな！」

俺は桐乃が言ったこと返事せず聞き通した。

梓「それで名前は何？」

桐乃「そう言えば聞いてなかった。名前は？」

？？「希、にゃ〜」

勇一「にゃ〜？」

梓「え！猫なの！？」

涙子「2人共、驚くところじゃないし、……って名前だけ？名字はないの？」

希「名字、わからない」

勇一「わからないってずーっと一人で生きて来たの？」

希「うん、」

ここまで一人で生きてきたなんてどうしてたんだろ……など俺はちよつと不思議に思った。

梓「でも希ちゃんどうするの？、もしかして引き取るんじや〜」

桐乃「当たり前でしょ！、希ちゃんを追い出すわけにはいかない！、私が面倒みるから 涙ねえお願い！」

桐乃は必死で希のことをかばって言った。俺はこんなに必死の桐乃を見るのは初めてだ。

涙子「桐乃ちゃん、私じゃなくて私達でしょう、」

桐乃「え！じゃ！」

涙子「希ちゃんは私達と一緒に暮らすんだよ、希ちゃんはそれでいい？」

俺もふつと希の方に向いた。希の顔から笑顔が見えた。もしかして希は初めて笑顔になったんじゃないかと思ってちよつとびっくりしたけどよかったと思う。

希「うん、別に構わない」

ということと希が天川家に入ったことで毎日の日常がより楽しくなりそう……と俺は思った。

涙子「そうと決まればさっそく食事にしましょう」

長い話が続いたがまだ食事を食べてなかったから今からテーブルに置いてある涙子が作った料理を俺、梓、希が食べ始めた。希の分は代わりに桐乃分をあげ、新たに自分の分を桐乃と涙子が作った。

そして食卓に楽しい会話が弾み時間が過ぎて就寝の時間、2階にて俺は自分の部屋で寝るのだが、ちよつと桐乃がいたから忘れた疑問を問いかけた。

勇一「なあ桐乃……」

桐乃「何？」

勇一「あの時、なんで殴ったんだよ」

桐乃「あの時？」

勇一「ほら、浴室で」

桐乃「あゝあれね、そりゃあんたが希ちゃんのは……裸を……みたから、罰を受けるのは当然……だから……そんだけ」

そして桐乃は自分の部屋に入ってドアが閉まった。

まあそうだなゝ自分でも悪いことはわかつているんだけど

勇一「仕方ない、寝るか」

俺はそのまま部屋に入り、何もせずベッドに寝て今日という日を過ぎた。

ちなみに希は桐乃と一緒に部屋で寝たそうだ。

翌日、俺はいつものように朝を起き制服に着替え食卓へ向かった。

勇一「おはよう」

食卓に集まっているのは涙子、桐乃、梓、希がいた。やはり俺は起きるのが遅いのかゝみんな早いな、

涙子「勇一、おはよう」

梓「お兄ちゃんおはよう」

桐乃「おはよう」

希「おはよう」

やっぱり桐乃は俺に対する態度が違いますけど…

勇一「ねえ姉貴、希はどうするの？」

俺は希のことをどうするのか涙子に聞いた。

涙子「ふふん♪それは女の秘密よ」

世の中、女の秘密は気になる。

涙子「梓ちゃんと勇一は先に行つて、後で私と桐乃ちゃんに行くから」

勇一「あゝわかった」

俺と梓は先に朝食を食つていつもより早い時間に家を出た。

勇一「女の秘密って何だろ？」

梓「さゝ秘密は秘密なんですよ」

そう言つて梓は姉貴や桐乃とは関わりがないことになる。

そして俺と梓は校舎口で別れ、別学年に向かった。下駄箱で枯渇にあった。

勇一「よう！枯渇」

枯渇「ん？あ！勇一 おはよう 今日はどうした？もしかして 口説きに口説けなかったりして」

勇一「バーカ、そんなことしねーよ」
と1日の始まりの開始の定番だった。

階段を上がって2年廊下……まだ枯渇と会話をしていると俺はふと殺気を感じた。

枯渇「？どうした？」

なんだろ 俺はこの殺気感じたことがある

俺はそう思っていたら後ろから俺に飛びついて来た。

勇一「！？」

？？「勇一様——！」

勇一「もうやめろ乙姫！」

乙姫「いいじゃないですか」

この子は俺の幼なじみの竜宮乙姫、小さいころから仲がよく小3まで遊んでたんがその年、別の場所へ引っ越し乙姫とは別れることになった。けど久しぶりに会ったのは高1の夏だけどその話しはまた今度で……

枯渇「おいおい ラブラブになるのはいが早く教室に行こうぜ」

勇一「誰がラブラブだ！」

乙姫「いいじゃないですかラブラブで、私は勇一様が好きです」

勇一「お前は気が早すぎる！」

などとはしゃぎながらも一緒教室に行った。

先生「では転入生を紹介します」

先生が転入生のこと言ったら周りが騒ぎ出た。

先生「入って来なさい」

先生に言われて入ってくる転入生、それは長い髪に薄紫色をして猫ミミのようで猫ミミじゃない形で可愛い女の子……

先生「天川 希君だ」希「にゃ」
俺はびっくりした。なんで希がいるのか
その理由は次回に続く

迷い猫? にゃ〜 (後書き)

どうでしょうか?

最近 テレビでいろんな作品がコラボしているのってよくみますよね
だから作ってみました。
感想をお待ちします

美少女と振り回し（前書き）

どうもお待たせしました。

いやゝ考えて書くのって難しいです

今回は

えむえむっ！と

百花繚乱サムライガールズを入れてみました。

毎回毎回 面白いボケぐらいを頑張って書きます

美少女と振り回し

「俺の姉妹達の憂鬱」

第3話

そう とある近所の高校に希が転入して来た。俺は涙子や桐乃には聞かされてないから驚いた。なぜ転入して来たかというところは昼飯の時、俺は希に話かけた。

勇一「希がなんでこの学校に？」

希「涙子や桐乃に入れてもらった」

勇一「やっぱり」

俺の予想は当たってた。まあ家に希を残すわけにはいかないからなくきつと今朝希を連れて校長に言って手続きをしたに違いない
枯渴「へえ希ちゃんか、可愛いな」

希「にゃ」

勇一「たくっ、……しょうがない 希、これからもよろしく」

枯渴「俺もだ」

希「よろしく」こうして俺と枯渴は学校で改めて希と交わした。

希は初めて学校に来てから言うものすぐみんなとなつた。とにかくにも希は午後からの授業をすっかり頑張っ受けていた。そして放課後、

俺は乙姫と枯渴と希で帰る途中だった。

教室を出てそしてわずか数20秒で階段に来て降り、1階まで降りる途中で俺は止まった。俺が止まったことで3人も止まった。

枯渴「どうした勇一？」

玄関に桐乃がいる……

勇一「希、玄関に桐乃がいるから、桐乃と一緒に先に帰ってて」

希「いいの？」

勇一「いいって いいって」

希「わかった」

希は俺達を置いて桐乃がいるところへ少し急いで行った。

枯渴「いいのか？　いかせて」

勇一「いいんだって」

乙姫「勇一様、優しいんですね」

勇一「ま、まーな」

残った俺達は再び玄関に向かった。そして下駄箱廊下でとんでもない事件が起きた。

？？「このクソが――？」

俺は声がした方に向いた。だがそれは遅かった、

その子の足が俺の顔に直撃し、さらに俺は反射の力で4メートル飛んだ。

勇一「ぐはぁ――っ！！」

この力はハンパない！誰だよ！

壁まではいかなかったけど廊下の床で倒れ俺は少しずつ頭を手で軽く押さえながら攻撃した人を見た。

勇一「いててて………たくっ！何すんだ！」

？？「はぁ？あんたが帰ろうとするから止めてやったんじゃない」
げっ！石動美緒！なんでここに………

彼女は石動美緒、学年は同じ2年だが組は別、しかも第2ボランティア部を作っているとか、あと石動美緒は暴言や暴行が非常に激しい、さらには石動美緒はDSで自信は気づかないとか、恐ろしい人だって自分を「美緒様」って言ってるんだよ！

でもでれる時が一番可愛いんだよねーでもその可愛さを利用することもあるんだよ

勇一「何ー！」

美緒「そんなことよりあんた協力しなさい！！」

勇一「協力？」

美緒「事情はあとで説明するわ、だから一緒に行くわよ」

勇一「え、え――！」

美緒は俺の手をつかみどこかに行こうとした。

あ！2人を置いてちゃまずい……

勇一「枯渇と乙姫、先帰ってくれ」

枯渇「え！でも……」

乙姫「勇一様！」

俺は美緒に引きずられながら2人に言った。

勇一「俺は美緒に何か手伝うことになっているから……」

美緒「ほくらさっさと行くわよ」

勇一「あゝれゝ」

俺は2人が遠くになっていきどこかに連れていかれた。

枯渇「……………仕方ない、乙姫 帰るぞ」

乙姫「わかりました」

……………

ここ第2ボランティア部屋

美緒「お待たせー！」

??「美緒さん、お帰りなさい、？誰ですかその人？」

美緒「ふっふっふっ、とうとうブタ郎の治療者を連れて来たわ！」

勇一「えー！、俺が治療者！」

美緒「嵐子、これでブタ郎のドMが治るわ……………ってそーいやあんな名前は？」

はあゝやっとな前のことに入ってたか

勇一「俺は天川勇一」

美緒「私は石動美緒でこっちが私の後輩の結野嵐子よ」

嵐子「よろしく」

なゝんだ2人共優しいそうじゃないか

しかし美緒は違った。

美緒「じゃそういうことで覚悟はできてるんでしょね！？」

勇一「あゝ美緒さん、なんで俺を襲う体制になっているの？」

美緒「それはあんたの力が必要だからよ！！」

勇一「うわっ！」

俺は美緒の構えをよけた。

美緒「なんでよけるの！」

勇一「そんな構えをしてたら誰だって逃げるって」

嵐子「ちよつと2人共、部室の中で走り回ったら危ないよ」

ひいゝよくわからないけど美緒に捕まったら何されるかわかったもんじゃない

俺と美緒は部室の中で走り回った。交わしては逃げ、交わしては逃げとその繰り返し……と突然、俺は足をつまづいて嵐子に接触して倒れた。

勇一「いたたた……」

あれ？なにやら柔らかくて暖かい何かが……

俺はそつと目を開けた。すると柔らかくて暖かい何かは嵐子の胸だった。

勇一「!!!!!!!!!!」

嵐子は俺がきがづいた10秒後に起きた

嵐子「いたたた……？」

嵐子は自分の胸に勇一の顔があった。

嵐子「きゃ—————」

勇一「うゝっ！」

嵐子の悲鳴で逃げようとしたら嵐子の足が俺の顔を上に蹴り

嵐子「男の子怖いよ——！」

勇一「ぐはあっ!!!」

俺は少し上へと浮き、そのあと嵐子の右手フックで俺の顔を殴り、そのまま逃亡した。

美緒「あ、嵐子！」

美緒は嵐子を追いかけた。

くそ……なんだよ、けど今がチャンス！

俺は部室を飛び出て走った。

そして1分後、走りをやめた。

勇一「はあはあ、たくついきなり殴りか……あれ？急に視界が……」

俺は……目がぼやき……倒れた。

??「?、!大丈夫ですか!」

勇一「……………んん、あれ?」

そういえば俺廊下で倒れたはずじゃ……俺の横にいる人は……

??「あ!きがづいた!良かった」

俺は起き上がり横にいる女の子を見て話した。

勇一「君は?」

??「私は柳生 十兵衛 三蔵」

勇一「名前なが!」

十兵「だから十兵でいいよ」

勇一「俺は天川勇一、なんか助けてもらってありがとう」

十兵「いいって いいって、十兵は当たり前のことをしたまですて」

勇一「あれ?先生は?」

十兵「あゝ先生はさっき出てったよ、」

勇一「そうか ありがとう」

今の状況を把握すると俺は十兵にたすけられたあげく保健室に来て寝ていたらしい。十兵のおかげで

勇一「さて 帰るとしますか」

十兵「え!まだ安定しないと……………」

勇一「大丈夫だって、この痛みなんかへっちゃらさ さっさと帰らないといけないし」

しっかし十兵の胸……………!!!!大きな!

十兵「そうか じゃ一緒に帰ろう」

勇一「え!」

十兵「ね!」

さらに放課後、午後17時30分 俺は柳生 十兵衛 三厳と一緒に帰っている、とゆうか優しい。
とある下校道

十兵「ねえ、勇一君はなんで廊下で倒れてたの？」

勇一「うーん、なんでだろう？ 思い出せない」

十兵「思い出せないなら、どこかで思い出せるよ」

勇一「そうかな………まっいつか」

十兵「それじゃ勇一君、またね」

勇一「うん、それじゃ」

俺と十兵はそれぞれ左右反対の道で帰った。

翌日、俺はいつもより早く1人で学校に向かった。

そして学校に入り、廊下で自分の教室に向かおうとしたら後ろから俺に声をかけてきた。

??「ちよつとそのあなた、」

俺は声をかけられた方に向きかけた。

そう、これからの俺の人生はこの声とかけた人によって変わってしまふことに。 続く……………

美少女と振り回し（後書き）

どうですか？

面白かったですか？

最近コラボ作品が多くなったから

やってみたくて

次回は俺の妹がこんなに可愛いわけがないポータブルのルート分岐風に始めます

ルート分岐は4・9話

つまり 9作品で4・9話を書きます

ルート開始時はパッと思いついた作品から始めます。

けいおん! ルート (前書き)

第4・1話から4・9話まで分岐ルート風に分けて書きます
今回は……

けいおん！ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・1話

俺の後ろに声をかけて来た女の子

?? 「おい、そこのお前！」

俺は声をかけられた方に顔を向き、話し返した。

よくみると女子なのに学ランボタンを全開にあけていて、カチューシャで前髪を止めてデコがみえてるし、なんか全体的にボーイッシュな感じ

勇一 「何？ 何かよう？ ……！」

ボーイッシュな女の子は俺の方に近いて来た。その女の子は………
って近………！

?? 「軽音部ってどこ？」

勇一 「え？ ……！」

?? 「あれ、聞こえなかった？ 軽音部だよ軽音部！」

勇一 「あ——軽音部ね、わかった、案内するよ え——と名前は？」
?? 「え？、あっ！ ごめんごめん 私は田井中 律」

勇一 「俺は天川勇一」

俺は律に軽音部への行き先を教えるため向かった。

そして歩いては途中で階段を2回登り、3分後 軽音部の部室に
いた。といっても誰がやっているのか本当にやっているのかは全く
知らないんだけど……

勇一 「ここが軽音部だよ」

律 「おお！ サンキュー」

俺は念のため挨拶をすることにした。

勇一 「おはようございます」

?? 「おはよう、って君は誰？」

勇一 「俺は勇一、律を軽音部に連れて来たんだけど………」

もう一人一人言うのはたいぎいからまとめて紹介する

今話しをしているのが秋山漣、その隣が平沢唯、なぜかティーセツトを持ってこちらを見て微笑んでみてるのが琴吹紬、みんな美人に見える

勇一「律、俺に感謝を……ってあれ？律は？」

俺は律を探した。しかしどこにもいない、すると俺の耳元で

律「けいおんぶへようこそ、ウェルカム！」

唯「入部おめでとう！」

勇一「な、何！入部だと！」

俺は驚いた、まさか俺を入部させる罠だったとは気づくことすならなかった。

紬「クッキーやお菓子もありますよ」

クッキー！お菓子か………ってお菓子などで吊られる俺じゃない！

漣「こら律、強引に誘ったら迷惑だろ！」

なんだかよくわからないけど今離れた方がいいみたい

勇一「それじゃ俺、教室に戻るから、じゃ！」

漣「え！ちよつと……」

俺は急いで部屋を出て階段を降りようとしたら梓と会った。

勇一「！あ、梓！」

梓「！お兄ちゃん！」

どうしよう、足が止まらない このままじゃ梓とぶつかってしまう、こうなったら

俺は次の右足を踏んでクイックターンで右側へと交わした。

これで梓にふつかることはない……と俺は確信をしたが、

梓「お兄ちゃん、そこ段差が」

勇一「え？」

段差？しまった右足の踏み場がない！このままだと……

俺の右足は踏み場の段差が低いため態勢のバランスが崩れ、転んだ。そして俺は気絶した。

あれ、前にも似たような……………
梓「お兄ちゃん!!」

気が付くと俺はまた保健室にいた。よくみると俺の周りには見覚えがある人達がいた。

漣「良かった、目が覚めて」

律「心配したんだぞ」

勇一「あれ？俺なんで保健室に」

唯「勇一君、階段から落ちたんだよ!」

紬「それでみんなで保健室に連れてきたんだけど」

どうやら俺が気絶している間保健室に運んだらしい……

梓「もうお兄ちゃんのバカ!」

勇一「ごめん……今何時？」

梓「何時ってもう12時30分過ぎだよ」

勇一「え!——」

まじか!じゃ今いる梓達は今休憩中ってこと!というより昼飯じゃん!

勇一「やば!みんなに誤って行かないと」

漣「おいおい、そんな体で大丈夫か？」

勇一「心配してくれてありがとう、けどやすんでいられる場合じゃないから 唯、漣、律、紬それから梓 看病ありがとうね」

俺はベッドから降りそのまま保健室からでて自分の教室へまず向かった。

律「たくっ勇一は!」

漣「そもそも律、お前が始まったことだろうが」

紬「まあまあ漣ちゃん」

唯「おちけつだよ漣ちゃん」

俺は教室に行きクラスメイトと枯渴達に挨拶的に言ったり先生にも言ったりして枯渴と乙姫と希でようやく一緒に昼飯が食えた。

希「勇一大丈夫？」

勇一「大丈夫 大丈夫」

乙姫「朝からいなかったから心配でしたのよ」

勇一「ごめんごめんって」

枯渴「たくっ、お前がいないと面白くないんだって」

勇一「はいはい 次からは俺が気をつければいいんだろ」
などいつものように話をしていた。

そして昼からはいつものように午後の授業を受け下校にはいつものようにみんなと帰って家に帰宅した。

今日は本当 疲れた翌日、今日は土曜日

俺は朝から勉強をしていた。すると

梓「お兄ちゃん、何しているの？」

勇一「勉強だよ」

梓「じゃ今日は私に付き合って」

勇一「ぶ——っ！っ！付き合う！？」

梓「お兄ちゃん、勘違いしてるかもしれないけど、デートじゃないから」

勇一「え？」

デートとじゃない！？じゃ他っこと？

梓「付いてきて」

俺は梓と一緒に外へ出た。

そして梓はいきなりのことを言った。

梓「お兄ちゃん、腕組んでいい？」

勇一「え！——」

梓「だめかな？」

なんで下から目線！やめろ！ねだる攻撃は！

勇一「だめじゃないけど」

梓「良かった、えいっ」

勇一「梓！」

梓「それじゃ行こう」

俺は頬を赤くして照れていた。今まで女の子と腕組んだことがないのに梓は気にせず組んだ。そして梓が行く行き先は梓がよく行く近所のスーパー

勇一「なんだよ付き合うってスーパーかよ」

俺はちよつとがっかりした。てっきり遊び系かと思ったが

梓「何そのがっかりとした態度は！」

勇一「別に」

梓「それよりこのスーパーで2000円以上買うとクジ券1回分出来るんだって」

勇一「へえ」

梓「へえじゃない、さあ行こう」

勇一「ちよつと梓」

俺の手は梓の手で引っ張られた。なんか恋人関係的な感じ

それから梓の買い物（夕飯の買い出し）を30分くらいした。梓の言うとおり2000円以上買ったら本当にクジ券が付いてきた。俺と梓はさっそく小さい抽選会場へ行った。

勇一「これお願いします」

店員「はい、1回分ですね どうぞ」

梓「お兄ちゃん 回してみて」

俺は梓の言うままガラガラを回した。その結果が……………

出た 青玉！

店員「おめでとうございます。第2回抽選券5回分を差し上げます」
そして帰宅途中

勇一「第2回目もあるんだ」

梓「良かったじゃない、商品は手に入れることは出来なかったけどまだ次がある」

勇一「そうかい」

結局1位の商品「豪華ifロシアレストラン食事券1組無料券」は当たることはなかった。あたれば枯渴達も誘えたのにな」

梓「今日はありがとうね、」

勇一「別に、礼を言われる程でもないよ」

梓「なんか無理やり付き合わせちゃって」

勇一「そんなことないさ 梓のためなら何でも付き合ってやるぜ」
なんか梓顔が火照ってる

梓「ありがとう お兄ちゃん」

俺と梓は買い物袋を持ちながら家へと帰った

こうして俺と梓の関係は新たに1歩進んだ
けいおん！ルート

END

けいおん！ルート（後書き）

どうでした？

うまくけいおんルートとして書きましたが

問題でもありましたでしょうか？

今回はけいおん！メインメンバーと妹梓と1日でした

次は4・2話で会いましょう

俺の妹ルート 4・2話(前書き)

今回はこのストーリー1分岐の原作である俺の妹編です

俺の妹ルート 4・2話

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・2話

俺に声をかけた女の子は

?? 「ちよっとそのあなた!」

俺は振り向いた、よくみると……あれ? 帯をみたら1年

勇一 「なんですか?」

?? 「この私をみて「なんですか」

とはよく言ったもんだわ」

勇一 「え?」

な……何! この子ちよっと生意気だな

?? 「私の名は五更瑠璃 ハンドルネーム 黒猫よ」

勇一 「黒猫!」

黒猫 「その反応だと ようやく思い出したようね」

そう俺と黒猫は2ヶ月前に1度会っていた。それはゲーム大会決勝
でのこと、その相手が黒猫だった。黒猫の実力は予想以上だった、
だが俺もなんとか互角にわたりあえた。

しかし黒猫は強かった。俺があとちよっとのところで黒猫は「形勢逆
転」という言葉通りになり優勝したあの黒猫。

勇一 「その…黒猫が俺に何か?」

黒猫 「あなたゴッドイーターバースト持ってる?」

黒猫は俺に話しかけながら歩いて来た。

勇一 「ゴッドイーターバースト? ああ、持ってるけど それがなにか
?」

黒猫 「今度 ゴッドイーターバーストチーム大会のネット杯があるの」

勇一 「へえー、もしかして俺もやれと?」

黒猫 「そうよ、ってあなた ピッチには聞かされないのかしら?」

勇一 「ピッチって誰?」

黒猫「桐乃ちゃんのことよ」

黒猫と桐乃の関係ってなんなの！

勇一「そうですか、桐乃からは聞かされてないけど」

黒猫「あら可哀想に、でも明日ピッチの方に行くから伝えてちょうだい」

そう言っただけで黒猫は俺を通り過ぎて階段で下りた。

時が過ぎてもう17時、俺はソファでゲームしている桐乃に黒猫の伝言を行った。すると桐乃が

桐乃「ちよつと部屋まで来て」

と自分の部屋へと戻るから俺は不思議思いながら付いて行った。

桐乃の部屋は普通の女の子の部屋、たいして変わったところはない

桐乃「ねえ、ちよつといい？」

勇一「な、何だよ」

桐乃「じ、人生相談があるの」

勇一「人生相談！、一体なんだよ！」

びっくりまさか桐乃が俺に悩みを話すなんて

桐乃「あんた、私と一緒に出なさい」

言うと思った。黒猫から少しだけ似たような言葉だった。

勇一「ああ、いいよ、ちよつど時間は空いてるし」

桐乃「あら、意外に聴いてくれるのね」

勇一「意外は余計だ」

桐乃「けどありがとう」

桐乃が初めて俺に礼を言った。しかも可愛い……

桐乃「あともう1つ人生相談がある」

勇一「まだあるのかよ」

桐乃「実はあんただけ私の秘密を教えてあげる」

勇一「秘密？」

そう言っただけで桐乃は襖に手を取り戸をあけた。その中は……大量――

――の妹ゲームやフィギュアなどが収まっていた

勇一「おま……お前！」

桐乃「私今まで隠して来たんだ……」

勇一「お前！まさか梓を！何するきだ！」

桐乃「声が大きい！あと勘違いだから！何もしないわよ！」

勇一「はっ！ごめん つい……」

妹ゲームなどあるからてつきりそうゆうのかと

桐乃「だから……このことは内緒にしてほしいから……お願い！」

桐乃が珍しく俺に頼むことはないからここは受け止めよう

勇一「わかった、桐乃の秘密は誰にも言わない、何かあれば言ってくれ 出来る範囲ならやってやる」

桐乃「あ……ありがとう」

桐乃、もっと素直になってもいいと思うのだけど……

桐乃「じゃ さっそくゴッドイーターバーストの特訓するわよ」

勇一「え？今から？」

桐乃「そう 今から！あんたに拒否権ないから」

前言撤回……やっぱり桐乃を可愛いくは見えない

結局俺と桐乃は晩御飯まで特訓し、そして晩御飯を食べ終えてまた特訓と、夜中まで付き合わされた。

そして翌日、俺は学校でぐったりしてた。

枯渴「どうした？勇一、気味悪いぞ」

希「昨日 桐乃と勇一は夜中までゲームしてた」

枯渴「ゲーム？たくっお前は！やりすぎにもほどがある」

勇一「仕方がないだろ あの桐乃が俺に頼んできたんだから」

本当めったにない桐乃が頼んできたんだ、断ったら一生ないんだから……

乙姫「勇一様は桐乃さんに優しいんですね」

勇一「けっほっとけ！」

そして放課後、俺はいつも通り帰りこのあと黒猫とゴッドイーターバーストの特訓をするため家に着き少し着替えと準備をした。そういえば玄関に見覚えがない靴があったなくじゃ先に桐乃の相手をしているのか、でも誰？

俺は疑問を思いつつ準備を続けると黒猫が天川家に来た。

黒猫「お邪魔するわ」

勇一「おう、黒猫 上がって上がって桐乃待ってるから」

黒猫「あら、私の知らないお友達が来てるようね」

勇一「そうみたい」

黒猫を玄関で迎えた後、桐乃の部屋へと案内をした。そして桐乃の部屋に入ると、本当に俺と黒猫が知らない人とゲーム（ゴッドイーター）をしていた。

桐乃「あっ！……遅い！いつまで待たせるつもりだ！」

勇一「俺はついさっき帰ったばかりだし、黒猫は今来たばかりだしそこまで時間は経ってない！」

黒猫「本当あなたは言い訳女かしら」

桐乃「なんだとー！」

勇一「そんなことよりその青髪の女の子は誰？」

桐乃「ん？あゝこなちゃんのことね、こなちゃんはネットで知り合ったんだ」

こなた「泉こなたです。よろしく」

勇一「俺は天川勇一」

黒猫「黒猫でいいわ」

こなた「黒猫ゝほゝはい、にゃ」

黒猫「なんの真似？」

こなた「いやいや 黒い猫だからにゃって」

黒猫「あなた私をからかっているのかしら」

やべー 黒猫の怒りが……

勇一「と…とりあえずゴッドイーターの特訓しよ こなたさんは強い方？」

こなた「強いも何もシングルは9割、タッグは7割程度だけど」やべー結構な上級者！

こうして今日の特訓は俺と桐乃対こなた黒猫でタッグバトルの特訓をした。こんな特訓の日が2週間続いて……3週間目の初めその日

はゴッドイーターバーストタッグ戦ネット杯、場所は

もちろん桐乃の部屋、それは桐乃のパソコンはw i l f iになってゲーム等がインターネットを使えるようにしているから、

今部屋に入るのは桐乃、俺、黒猫、沙織

沙織は急遽呼んだ。こなたも一緒にやろうと桐乃が誘ったが用事があり参加出来ないから沙織を

まあネット杯はネットを通じていろんなユーザーと戦うので移動せず家でやる事が出来る。

公式はトーナメント

俺と桐乃チームは3回戦まで勝ち進んだ。だが準決勝のあたりが黒猫&沙織チームとあたり見事完敗した。その後俺と桐乃は2人を応援した。そして黒猫&沙織チームが優勝し、大会の責任者から超限定の装備品とオリジナルクエストとレアアイテムをもらった。

大会が終わり、黒猫と沙織は帰ることにした。

沙織「それではキリリン氏、勇一氏それではまた」

黒猫「ふっあなたの力も落ちたもんね」

2人はそのまま家を出て帰った。

桐乃「きい——！何なのあの黒いの！マジ腹立つんですけど！」

勇一「まあまあ、終わったことだからまた頑張ればいいよ」

桐乃「あんたのせいでレアアイテムゲット出来なかったじゃん！このバカ！」

そう言って桐乃は再び自分の部屋へと戻った。

勇一「はあ——、本当なんか疲れるな」

もういやになっちゃうくらいだ。ホント桐乃は俺に冷たいな

勇一「あ！買い出し頼まれてるの忘れてた」

つつい遊びに夢中になり夕方になってしまった。俺は急いで財布と袋を持って近所のスーパーへ行った。今日はいろんな食材が割引していて安く買えた。レジ員から

店員「はい、くじ引き券です」

俺は店員からくじ引き券をもらい、すぐそこの抽選会場でくじ引き

をした。ガラガラを回し出た。結果は

店員「おめでとうございます第2回抽選券ナンバーが当たりました。

」

勇一「はあ」

店員「はい、どうぞ 次回の時に使いますので取っておいて下さいね」

俺がもらったのは ナンバー218 ナンバーカードを買い出し袋と一緒に入れた。

勇一「さうと、今晚は手伝おうかな」

今日までいろんなことがあったからなくたまには良いことしても罰は当たらないだろ

俺は買い出し袋を持ったまま家へと帰った……………END

俺の妹ルート 4・2話（後書き）

どうだったでしょうか？

こなたはゲームつながりでださせてました。

中々黒猫の毒舌は難しいですね

次回は とある科学ルートです

とある科学ルート（前書き）

俺の姉妹達

4・3話開始

今回はとある科学ルートです
ますが気にせず読んで下さい

ちよつと省略しているところがあり

とある科学ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

第4・3話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

?? 「あのゝすみません、」

勇一 「はい、」

俺は振り向くとそこには……………

勇一 「あ！初春じゃないか!？」

初春 「お久しぶりです。勇一君」

実は俺と初春（残りの2人を含めて3人）は去年からの女子友達である。いつもは涙子も入れて5人でいろんな場所に行ったりなどしていた。

勇一 「ホント久々だな、それで俺になんの用？」

初春 「実はですね、明日御坂さんと白井さんに会うんですけど勇一君もどうですか？」

勇一 「え？来てもいいの？」

初春 「はい！御坂さんや白井さんもきっと喜びます」

勇一 「そうか！俺も会うのは久々だもんなく、ありがとう初春」

初春 「どういたしまして、それじゃ御坂さんと白井さんに伝えておきますね。詳細は夕方改めてメールしておきますから、あとサテンさんにもメールします。」

勇一 「うん、ありがとう」

初春 「いえいえ、それでは勇一君、また……」

勇一 「おう」

初春は会話後、初春は階段がある方に行って姿を消した。そして自分の教室についた。

勇一 「おはようッス」

枯渇 「おーッス」

乙姫「おはようございます」

希「おはよう」

と、いつも学校でよく会う枯渴と乙姫、俺がついた時間は午前8時5分ごろだった。

枯渴「今日はどうした？少し遅かったけど」

勇一「ん？あゝ、ちょっと女子友で」

枯渴「何——！」

乙姫「勇一様！どうゆうこと！」

あれゝなんで枯渴と乙姫が怒っているのかなゝ

勇一「ど、どうしたの2人共、」

枯渴「どうしたもこうしたもない！なんでお前が他の女子と仲良くしてんだよ！」

乙姫「勇一様はわたくしより他の女を取りますの！」

勇一「ちょっと待て！！乙姫、お前は勘違いでそうは言っていない、あと枯渴！これはただの友達　去年お前が知らないところで知り合っただ。」

枯渴「くっくゝなんでお前ばかり」

乙姫「勇一様！私のことどう思っているのです！？」

もう枯渴はなんかおかしいこと言ってるし、乙姫は……………もうなんだか面倒くさいなってきた

勇一「乙姫！俺は幼なじみとして好きだけど、異性としてはまだわからん、でも普通に好きだ」

俺が言った瞬間、教室にいるみんながざわめき声を止め、こっちを見た

勇一「！！！！こ、こっち見るな！」

先生「お前等　席につけ」

ナイスタイミングのところみんな席についた。そしてまたいつもと変わらない放課後までの半日……………

放課後の時、

枯渴「勇一一緒に帰ろうぜ」

乙姫「勇一様 帰りましょう」

勇一「おう わかった、希も帰ろう」

希「うん」

俺は立ち上がった瞬間、ポケットから携帯バイブが震え俺はバイブを止め携帯からのメールを見た。

あ！………初春からだ！内容は………

初春「先ほどはありがとうございますってちょっと固いですよね、それで日程についてなんですけど明日の13時に大広場公園の杉の木下で待っています。あと御坂さんと白井さんも来ますので………：それでは」

とのメール内容、初春のやつ

枯渴「勇一 何してんだ！」

乙姫「早く帰りましょう」

勇一「おう すまんすまん」

俺は2人から見つかからないようにポケットに戻し4人で帰宅することにした。

帰宅後、俺は涙子に初春の誘いのことを話していた。

勇一「ねえ涙子」

涙子「何かな？勇一」

勇一「初春からメールは来た？」

涙子「ああ、初春ね うん来たよ それが何か？」

勇一「ううん、別に」

ですよねーやっぱみんなで集まるんだしそうだよね

翌日、俺は昨日の初春からのメール通りの場所へ向かった。しかし

涙子とは一緒には来てない。それは

勇一「え！後で行くって？」

涙子「うん、ちょっとやりたいことがあるから 先に行ってて」

勇一「あ…うん、わかった」

~~~~~

やりたいこと？なんだろう………

そう言ってるうちに約束の場所についた。そこには可愛いワンピース服と造花のカチューシャをした初春がいた。

勇一「あ！やあ、初春」

初春「あ！こんにちは勇一君」

勇一「今日の誘いありがとう」

初春「いえいえ、あれ？サテンさんは？」

勇一「あゝ涙子はやりたいことがあるから後で来るって言ってたけど」

初春「やりたいこと？」

とその時、初春の後ろに影の人体が………

？「うゝいゝはゝるー！」

いきなり初春の後ろから涙子が笑顔満遍なく現れ、初春のスカートが涙子の方に開いた。俺はびっくりして言葉が出なかった。

初春「きゃー！ー！！」

涙子「おっ久さー！！初春 おっ！今日は限定のシマパンだね」

初春「おっ久さじゃないですよ！！いつもいつもスカートめくらないで下さい！、だいたいサテンさんは……」

勇一「まあまあ、そういえば御坂と白井は？」

初春「え？あゝ御坂さんと白井さんはもうすぐ来ます」

初春がそういうと本当に来た。

御坂「ヤッホー勇一君」

勇一「あ！御坂」

御坂「勇一君みても変わってないね」

勇一「御坂も変わらないところがあるんじゃない？」

御坂「！！！！ど……どこみてんのよ！」

その後 俺の言葉に続いて誰かが言った。

？「さすが勇一君、お姉さまが気になってるところをズバリ当てるなんて」

御坂「って隠れてないで出てきなさいよ黒子！」

黒子「さすがお姉さま」

黒子は木の影からでて御坂に飛びついた。なんだかんだで仲がいいのかな」

勇一「それで初春、今日はどうするの？久々に集まったけど」

初春「そうですね、久々にみんなでいろんなところ回りましょう」

御坂「いいわね、みんなで行きましょう」

涙子「よしそれじゃ私が案内しますよ」

とにもかくにも涙子が1番に出てあとのみんなは涙子について行った。俺達はゲーセン、買い物、パフェ的、遊園地など行った。遊園地の場合、御坂はカエルの着ぐるみに近寄ってなんだが楽しそうだったな」

そして時間帯は夕方、結構楽しかった。

御坂「ふう、疲れたわね」

黒子「全くお姉さま、物の限度というもの知らないのですの？……その袋」

御坂「い……いいじゃない別に1つや2つ」

御坂の手には袋詰めが2つあった。多分なんか好きな物を買ったんだろう。

初春「今日は楽しかったですね」

涙子「そうだね初春、またみんなで行きいね」

勇一「そ……そうだね」

今日は本当、振り回されたようなつかれた

黒子「でもこうして再び集まって楽しい思い出がまた1つ出来ましたの、勇一君、サテンさん、初春本当にありがとうございますの」

御坂「私からも礼を言うわ」

勇一「いやいや、こっちこそありがとう」

初春「それじゃ私達はこれで、サテンさん、勇一君」

涙子「うん、またね、白井さん、御坂さん、初春」

俺と涙子は初春と黒子と御坂と別れた。

涙子「あ！そうだ！ちょうど外に出ているんだし夕飯の買い出しに

付き合って勇一君」

勇一「え！あ：まあ：」

唐突すぎるけど買い出しに付き合うことにした。とある近くのスーパーで夕飯の買い出しをし、そして終わると抽選券がもらえた。この抽選券を抽選会の店員に渡しガラガラを回した。すると出たのは468の玉が出てきた。

店員「おめでとうございます。番号が出たあなたは次回のチャンスに参加出来ますのでくれぐれも持って下さい」  
そう言われ、スーパーを出た。

涙子「良かったね 次回もチャンスあるって」

勇一「そうだね」

涙子の手には袋いっぱいにあった。すると向こうに御坂らしき人がいた。俺と涙子は御坂らしき人に近付いてみた。後ろ姿は本当に御坂が似ている

勇一「御坂：さん？」

？「なんですか？とミサカは疑問を返します」

涙子「はい？」

勇一「そこに御坂がいたから」

ミサカ「そうですか、ですがミサカは今から行かなくてはならないところがありますからとミサカは2人に注意事項を言います」

ミサカはそのまま俺達を置いて走りさった。

涙子「なんだったんだろ御坂さん」

勇一「なんかおかしいような」

涙子「まっ、御坂さんには用があるんだと思うから、家に帰ろう」

勇一「そうだね」

結局ミサカのことを見過ごし家に帰ることにした

END



## とある科学ルート（後書き）

どうでしたか？

とある科学に魔術のミサカ妹を出させて見ました。

とある科学の涙子ととある魔術のミサカのコラボ  
たった1シーンだけやってみました。

なかなか会うことがない2人

ミニミサカと上条とインデックスを出そうと思いましたが字数的に  
少なくなりそうなので止めました。

次回は2作アニメをどちらか出そうか迷ってます

ISか迷い猫か

ぜひ感想をお願いします

## ルートIS（インフィニットストラトス）編（前書き）

どうも

今回制作したきっかけはつい最近見て、見終わったところです。ヒロイン達が可愛くて小説にしてみました。

好きなヒロインは

ラウラ・ボーデヴィツヒ

臨海学校に行く時、ラウラの固く厳しいイメージが崩れ、誉められるものすごいデレデレになるところが好きです

まあ今回はデレデレの様子は作ってないです　そしてヒロイン達が勇一に相談をするために…………

## ルートIS（インフィニットストラトス）編

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・4話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

?? 「おい！そこのお前！」

俺は自分のことだと思い振り向いた。するとそこには篠ノ之箒がいた。

勇一「ん？…！箒！お前か！」

箒「お前か じゃない！勇一」

勇一「何？」

箒「実はお前に話が……」

とその時ちょうど学校のチャイムが鳴ってしまった。

箒「あ！……くっ！しかたがないまたあとメールするから絶対に来いよ！！」

そういつて箒は自分の教室に戻りに行った。

勇一「ん？なんだ箒？」

俺も素早く自分の教室へと行った。

そして時間は過ぎていき昼飯の時間になった。

枯渴「勇一 みんなでめし食いに行こうぜ」

勇一「ああ…」

ちよつと待ってそういえば今朝箒がメールするって言ってたあれ

俺はすぐ携帯のメールをチェックした。箒からのメールは

「箒「今日の昼 屋上で話会うから来い！」」

なんとも単純な普通のメール でも断るわけにはいかない

勇一「すまん枯渴、やっぱいいわ ちよつと別のだちに誘われてるから」

枯渴「あゝそれなら仕方がないか、じゃ俺から伝えておくよ」

勇一「悪いな 枯渴」 枯渴「いいってことよ それより早く行って

やんよ」

勇一「ああ すまんな―」

俺は箒の方に優先し枯渇にはみんなに軽い事情を言わせることにした。そして屋上に到着、ちょうど箒がいた。

勇一「お！箒」

箒「ん？ おっ 勇一やっと来たか」

勇一「全く箒は、俺に何を伝えたいんだ？」

箒「実はなく、い…一夏のこと…なんだが お前親友…なんだろう？」

俺は一夏のことを思った。そういえば一夏とは確かに親友だったな

勇一「確かに親友だ、それで一夏がとうした？」

箒「実は、い…一夏が私のことを構ってくれないんだ！」

こうゆうのって悩みの相談じゃないか！

勇一「それは逆に箒が原因なのでは…？？」

箒「なっ！それはどうゆうことだ！」

箒はいきなり俺の胸ぐらをつかみ威嚇した。

勇一「だって…箒は一夏の前では素直になれないし、ケンカとか見るし、嫉妬とかしてるし、今日の一夏は呆れてるんだよ」

箒は俺の胸ぐらを離れた。

箒「ううう…じゃどうすればいいんだ？」

勇一「そうだな…一夏を誘ってデートしろ！！」

箒「な！何――！」

勇一「ががががが…（弁当食ってる音）てなわけで箒は頑張っ  
て一夏にデートの約束をするんだ、もし約束したら箒をサポートを  
してやるよ」

俺は弁当を食べ終わり元あった袋にもどした。

箒「え！ちよつとそれは…！！」

勇一「それじゃ頑張れよ！」

俺は急いで箒から置いて逃げ屋上から降り3階へとついた。

勇一「全く箒は、幼なじみなんだから何とかなるんじゃないのかよ」  
と言いながら歩いていると後ろから…

？「見つけた——！」

俺が振り向く瞬間、走ってきた人と激突し、一緒に壁まで飛んだ。

勇一「いたたた……って誰だよ！、！ 凰鈴音じゃないか」

俺の上に乗っているのは一夏のセカンド幼なじみ凰鈴音 通称・鈴  
鈴「勇一、あんたに聞きだいたいことがある」

勇一「なんだよ」

鈴「一夏をどうやったら独り占め出来るの？」

またもや相談かい……箒に続いて鈴まで

勇一「は——！俺が知るわけないだろ！」

鈴「いいから教えなさいよ！あんた一夏の親友でしょ！」

俺は鈴に体を揺らされた。反対のことを言ったら面倒になりかねん、仕方なく教えるか

勇一「それじゃ 一夏を強引に連れ出して、2人きりになれる場所に行つて、いちやいちゃすればいいんじゃない？」

鈴「な！何を言ってるのバカ！」

勇一「ぐふっ！」

おもいつきり殴られた俺

鈴「でも考えてみれば悪くないわね」

鈴はやっと俺の上から降りた。

鈴「あんたの考え 使わせてもらうから、あとでメールするからそれじゃ ね」

鈴はこの場から走り一夏のところに行つたのかもしれない。

勇一「たくっ やれやれだぜ」

鈴から解放された俺はなぜか調理室の前にいた。すると後ろから声をかけられた。これってデジャヴ？

？「勇一さん」

俺が振り向くとそこには金髪で美しい外国美女のセシリア・オルコット

勇一「おお！セシリア！今日はどうした？」

セシリア「実はですね、一夏さんにわたくしの弁当を食べさせたい

のですが、一夏さんあまりお気に召さなかったようなんです。どうしたらいいでしょうか？」

おいしい箸や鈴の次はセシリアかよ……全く今日はなんなんだよ！！

勇一「そ…それは、セシリアの弁当に問題がある！」

セシリア「わ…わたくしの…弁当に！」

勇一「正直に言うのと、だな…セシリアの弁当はちよつと味が強すぎるんだ、もうちよつとさじ加減を……」

セシリア「酷いですわ、わたくしの味を嫌うなんて」

勇一「ち、違うんだセシリア！俺はただ味が強いから一緒に作って一夏を喜ばそうと、もちろん俺はサポートをするから」

セシリア「それって本当ですか？」

勇一「ほ、本当！本当だって！」

セシリア「わかりました。勇一さんがわたくしの下部になるということと許してあげましょう」

あれ？セシリアは何か誤解をしているような気がする　俺はちよつと考えて黙った。

セシリア「では勇一さん、メールで連絡しますのでその時にお願いします」

勇一「え？あ、はい」

セシリアは来た道に戻って行った。全く次から次へと……

俺は1階の渡り廊下を歩いていると、とてでもない声で俺をんだ。

？「勇一　——！」　勇一「ん？」

俺は振り向くと2メートル離れたところに眼帯をした白き髪の女の子が俺に向けてピストルを……ピ……ピストル！

眼帯の白き女の子はピストルを撃った。俺は思わず目をつぶった。

勇一「……………ん？」

俺は恐る恐る目を開けると、あれ？撃たれてもないし、壁に当たった音もしない

？「これぐらいのことで何をびびっておる？」

眼帯の白き女の子はピストルを構え終えると俺の方に向かって話かけて来た。

？「勇一、お前 私の嫁の親友だったな」

勇一「久しぶりにあったと思えばいきなりそれかよ ラウラ」そう

この女の子ちょっといかつくきりつとした白き髪をして眼帯をした外国美女のラウラ・ボーデヴィツヒ

勇一「確かに一夏とは親友だ」

ラウラ「なら話が早い 私の嫁が私のことをどうすれば好きになつてくれるか教えろ！」

勇一「そ：そんなこと言われても」

ラウラ「私の命令が聞けないのか！」

ラウラは鈴・箒同様胸ぐらをつかんだ。

勇一「ちよつと待って！ 俺だって異性に告白したことがないんだ！」

ラウラ「くっ！ たわけ！」

ラウラは俺の胸ぐらを離し、俺は地面に倒した。

勇一「いったたたた、だから俺が一夏を誘っておくし、それなりのセリフを考えておくから」

ラウラ「本当だろな！」

勇一「本当だって、男に二言はない」

ラウラ「ふっ、ならば待ってる」

ラウラはそのまま俺を過ぎて去って行った。やべーな、早いうちにやっておかないと何されるかわかったもんじゃない

そして時間が進み

（放課後）

学校出る時、またもや女の子が俺に話かけて来た。もう俺はゲームやアニメの主人公か！

？「ねえ もしかして勇一君？」

俺は振り向いた。そこには金髪で長髪でスカートが短く可愛い女の

子 シャルロット・ジュノア

勇一「シャルロット！」

シャルロット「良かった。ねえ一緒に帰らない？」

シャルロットは笑顔満々だった。結局一緒に帰ることになった。

勇一「ねえ シャルロット悩み聞いていいか？」

シャルロット「何か？」

勇一「聞いてよ！ 箒や鈴、セシリアやラウラ達が一夏のことで俺に相談するんだよ！」

シャルロット「それはみんな一夏のことが好きなんだよ」

勇一「はあゝ本当疲れるな」

なんで俺に相談するのかなゝ俺以外に相談相手がいるだろ、確かに一夏はもてるだろうよ

勇一「あ！ そういえば買い物 頼まれてたんだ」

シャルロット「それじゃ僕も付き合うよ」

勇一「そんな！ 悪いって」

シャルロット「いいから いいから遠慮はいらないよ」

シャルロットは優しい人、俺が見る時は優しく接していて本当可愛くて……………

シャルロット「どうしたの？ 顔赤いよ」

勇一「え！ べ…………別に」

シャルロットと微妙な感じで話しているとあるスーパーに来た。勇一はカバンから今日の夕食メモしを取り、メモし通りの食材を買った。食材は袋に詰めたが2つ分の重さ、そこでシャルロットに1袋持ってもらった。

勇一「今日の買い物 手伝ってくれてありがとう」

シャルロット「そんないって 当たり前のことをしたまでだって」

勇一「それじゃ シャルロットは一夏のこと好き？」

シャルロット「……………な！……………なんで！！！」

勇一「だってシャルロットも一夏のこと好きそうなんだもん」

俺とシャルロットは一緒に家まで帰ることにた。本当振り回される



男はつらいぜ

……

シャルロット「勇一のバカ」

シャルロットが何か言ったようなきがしたけど俺は無視して一緒帰った。

END

## ルートIS（インフィニットストラトス）編（後書き）

再びどうも

2次元美女っ子です 名前覚えてもらえたでしょうか？

ISのルートどうだったでしょうか？

ちゃんとヒロイン達の相手をしましたがIS主人公は出すことは出来ませんでした お話は続を作るためにしました。続きは後々に考えておきます。その時はIS主人公も出します。

またまたすきなヒロインはシャルロットと箒ですね

ちよっと長々としましたがまだまだルート話は後半になります

最後に一言

「早くルート話を終わらせた——い！！」

次回でまた会いましょう

## 迷い猫オーバーラン ルート（前書き）

どうも 2次元美女っ子です

今回は迷い猫ってしたらかぶるじゃん！と思って正式名称にしました。

まあ迷い猫だから……猫でしょう

まあごゆっくり見てください

## 迷い猫オーバーラン ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・5話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

?? 「ちよっとそのあなた」

勇一 「はい？」

俺は振り向いた。あれ？誰もいない

勇一 「おかしいな 呼ばれたような」

? 「ちよっと！無視しないでよ！」

勇一 「ん？あゝそこにいたのか千世」

この子が…って言ったら悪いけど髪がオレンジ色でちよっと長く背が少し小さい女の子

それが梅ノ森 千世 彼女は金持ちの癖によく威張ってる

千世 「いたのじゃないわよ あなたを呼んでからずっといたわ！」

勇一 「ごめんごめん」

千世 「まったく、ってそうじゃなくてあんたに話がある」

勇一 「何？」

千世 「あんた キャットパークを知ってる？」

千世 はいきなり英語風に言った。なんだそのキャッツパーク？

勇一 「知らないけど」

千世 「そこわね いろんな各国から集まって来た猫ちゃんがいるのよ」

勇一 「ね…猫！」

まじかよー 猫って言ったら猫耳やさらさらふわふわの毛と可愛い尻尾、そして柔らかい肉球！

俺は大の猫好き、猫を見て触ると全体的になまってしまうほど猫が大好き、と上の空を見ていた

千世 「ちよっと……聞いてる？」

勇一「！聞いてる聞いてる」

千世「あっそ それであんた大人数で来てくれない？」

勇一「大人数？なんで？」

千世「決まってるじゃない キャットパークは5人以上じゃないと入れないだからね！」

そんなに大人数で来てほしいのかうとなれば金が心配、

勇一「じゃ入場料はどうするの？」

千世「大丈夫 入場料は私に任せなさい、あんたは大人数でくればいいから」

勇一「はあー」

こうして俺は入場料のことは千世に任すことにして俺はまず姉達に行くかどうか聞くことにした。そして天川家に帰宅、まず涙ねえに聞いた。

涙子「え！キャットパーク？」

勇一「そうそう、涙ねえは行く？」

涙子は今夕飯を作っていた。

涙子「うん、行くよ 子猫ちゃん見てみたいし」

涙ねえはOKっと

次は……桐乃かう 俺はちょっと気が引けた、桐乃は今ソファで雑誌を読んでる

勇一「桐乃……」

桐乃「何？」

勇一「俺の友達がキャットパークいわゆる猫園に行くんだけど……桐乃は行くのか？」

桐乃は聞く耳持たない態度でいたが反応はしていた、雑誌を読んで桐乃「行かない あたしモデル活動があるから」

勇一「そうか……ならいつか」

俺は桐乃がいる場所からはなれ2階にいる梓の部屋に向かった。部屋のドアをノックし返事を聞いた。

勇一「梓いる？」

梓「うん、入って」

俺は梓の言うまま入った。

梓「お兄ちゃん 何か用？」

勇一「実は友達からキャットパークに誘われたんだ、んで俺と涙子は行くことになってるけど梓は行く？」

梓「キャットパークうん、私も行く」

勇一「わかった、じゃ夕飯の時に改めて言うから」

と俺は部屋から出る。するとそこにパジャマ姿の希がいた。

勇一「！希いたのか……まさか話聞いた？」

希「うん」

勇一「じゃ……行く？」

希「うん」

勇一「わ……わかった」

会話終了後、希は1階に降りて行った。そして10分後、夕飯の食卓、俺はそこで時間や日時と場所を教えた。そのあとは普通に過ごした。

そして約束の日、千世とメイド2人佐藤と鈴木はキャットパーク駐車場にいた。もちろん高級ロング車で来て待っている。すると高級車の後ろから天川達が来た。

勇一「ごめんごめん、待った？」

千世「ふっ、少し遅いわよ！」

涙子「いやゝ家から駅に行ってそれから電車で向かってやっとこれたんだもん」

千世「……これ、あんたの知り合い？」

千世は俺に向かって言った。はい、そうです……なんて言ったら千世はびっくりするから言わないでおこう。

勇一「まあ そういうこと」

千世「あっそ……あれ？なんで文乃がいるわけ！」

文乃「何よ！いちゃ悪い！」

勇一「一応文乃も呼んだんだ」

千世「ふうん わかったわ、それじゃ無駄話はここまでにして早く行きましょう」

文乃「なんであいつが仕切っているのよ！」

勇一「まあまあ文乃、それじゃ涙ねえ、梓、希、行くか！」

涙子「うん」

梓「はい」

希「にゃ」

というわけでキャットパークに入ることにした。そこには各世界から集まってきた珍しい猫や愛くるしい猫などいる。ちなみに勇一達は朝一番手に来ていた。

勇一「な」千世「この入場料はいくらなんだ？」

俺はみんなに聞こえないように千世だけに小声で言った。

千世「ざっと2, 500円よ」

勇一「高！」

千世「まあ本当は5, 000円だけど、私の力とこの割引で全員合わせて半額にしてやったから感謝しなさい」

勇一「はあ」

ホントそれには千世に感謝だな、そして俺と涙ねえと梓と佐藤さん、文乃と希と鈴木さんで別々に見に行った。

俺達はまず日本産の猫を見に行った。

涙子「うわあ——可愛い猫いっぱい！」

梓「ホントだ可愛い！」

涙子「抱いてもいいかな？」

千世「いいわよ」

涙子「やったー！」

梓「じゃ その次私も」

2人共なんだが嬉しそう、もう笑顔見るだけで幸せだ。（よくある一言）

勇一「じゃ俺、文乃達のところ行ってくる」

涙子「うん、わかった」

梓「行ってらっしゃいお兄ちゃん」

佐藤「彼女達は私が見ておきますので」

俺は涙ねえ達を置いて文乃達のところに行った。

2分後、文乃達を見つけた。

勇一「やー文乃と希と…鈴木さん、その猫何産？」

希「この猫はアメリカ生まれで……」

急に希が抱いてる猫のことを説明し始めた。俺と文乃は全然わからず目が点になり？を浮かべた。

希「……で、この猫がそうゆう風な名前」

文乃「そう……す……すごいわね」

勇一「め……珍しい……んだね」

鈴木「希さんは猫のこと詳しいんですね」

希「にゃー 好きだから」

まあ……想像はつくけど

文乃「で、あんた何しに來たわけ？」

勇一「そりゃあ様子を」

文乃「あっそ」

あっさりきられた、………とにもかくにも俺達は昼まで世界の猫、子猫を見物した。そんでもって昼の外でピクニック気分的をしていた。

勇一「おいしい、おいしいよ千世」

千世「そ……そう！ 私なりに頑張っただがら」

まあ偉そうな態度……

佐藤「そこをこの佐藤と」

鈴木「このわたくし鈴木がサポートしましたわ」

千世「ば……バカ！ 余計なこと言うな！」

千世って頑張ってるんだね見えないとこで

涙子「お弁当ありがとうね、私弁当作るのを忘れたのにこんなにいい用意してくれたんだものありがとうね……あ！ そのタコさんウインナーは私の！」



梓「涙ねえはそこゆずるとこだよ！」

希「卵巻き　おいしい」

文乃「まあ今回は、あんたの分を食べさせていただくわよ」  
こうして楽しい半日は思いついた出になった。

勇一「それじゃ　帰りますか」

千世「えー！もう帰るの！」

勇一「ごめん、もう帰らないと夕方になってしまふ距離なんだ」

ホントここまで電車で1時間くらいかかってしまふんだ。その分涙ねえにもちよつとは出したんだけど

千世「それじゃ私が送り返してあげるわ」

勇一「ホント！ありがとう千世　涙ねえこれで楽に帰れるね」

涙子「うん、それじゃお言葉に甘えて」

俺達は千世が乗る高級車で帰ることが出来た。高級車の中には前に佐藤さんと千世と鈴木さん真ん中には、涙ねえと文乃、後ろは俺、梓、希　ちよつと今の環境は言葉がでにくい

30分後、やっと家についた。

勇一「今日は本当にありがとう　誘ってくれたり、お弁当食べさせてくれたり、送り迎えしてくれたり感謝するよ」

涙子「ありがとうね」

梓「ありがとうございます」

希「ありがとう　にゃ〜」

千世「別に、いいわよ　また誘ってあげるわ」

佐藤「文乃様は私達が」

鈴木「送って行きますので」

勇一「ありがとうございます。文乃、またな」

文乃「じゃ　また」

高級車は前進し、俺達が見えなくなるまで行った。

涙子「今日はちよつと疲れたから休むとしましょうか？」

勇一「だな……」

俺達は家に入り、いつもと変わらない日常を過ごした。

E  
N  
D

## 迷い猫オーバーラン ルート（後書き）

どうでしょうか？

ホント見ている人はちゃんと感想までしてくれます？出来ればかいてほしいのですが

今まで投稿してきたアニメが分からない場合は本編のアニメを見てからじゃないとわかりづらいと思います

では次回からパーソナルラジオ局みたいにやっていきますので、あとゲストを呼んじゃいますので

お楽しみ

## バカテスルート（前書き）

どうも2次元美女っ子です  
我ながら遅く始まりますが  
今日からラジオ的なミニトークをしていききたいと思います。  
ではバカテスルート編の後で後ほど  
楽しく読んで下さい。

## バカテスルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・6話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

?? 「あのー勇一君」

勇一 「はい」

俺は振り向くとそこに髪はピンク色で目はパープル色で胸が非常にでかいし、スカートがちよっと短くて（体操座りしたら見えてしまう）スタイルがいい美女の姫路瑞希さん、でも姫路さんがなんで俺に？

姫路 「あのー勇一君…ですよね？」

勇一 「あ…はい、そうですが…」

姫路 「良かった、ちよっと聞きたいことがあるの」

勇一 「聞きたいこと？」

何だろ、姫路さんが俺に？優秀な姫路さんが俺に？

姫路 「実は明久君が私のことをどう思っているか知りたいんです」

勇一 「姫路さん…それは自分から言った方が…」

姫路 「あ…明久君の前で言うのは恥ずかしい」

姫路さんは顔を赤くして手を頬に当て背いた。まあ女の子だし好きな人に目の前で言うのは誰だって恥ずかしい、きつと姫路さんは明久のことが好きだと思う、ここはこの俺が愛のキューピットを…

勇一 「姫路さん！」

姫路 「はい！！」

勇一 「ここは俺に任せて」

姫路 「え？任せるって…」

俺は振り返り、教室へ向かった。

勇一 「また後ほど伝えるから」

姫路 「一体どうするんでしょうか…」

（廊下にて）

勇一「雄二、お願い！協力して」

俺が頼んでいる人は坂本雄二、あるやつらだけは頼れる存在であつて悪友でもある

雄二「どうしてだ？」

勇一「姫路さんはきつと明久のことが好きなんだよ　だから姫路さんの恋を实らせよ！」

雄二「お前なくあいつらの関係に割り込むのか」

勇一「なんだよ！雄二は霧島さんといちゃいちゃして」

雄二「あれは翔子が勝つてにしてて、俺は……」

？「雄二、今何か言つた？」

雄二「しょ……翔子！なぜお前がここに！」

えーつと、雄二の後ろに現れたのは霧島翔子、学力主席No. 1で雄二のことをずーつと好きとか

霧島「……雄二が私のうわさをしてるから」

雄二「別にうわさじゃねえし！お前のことじゃ……ぎゃああああ」

霧島「……雄二　連れて行く」

なぜか霧島さんが雄二にスタンガンで気絶させ、連れていかれた。

雄二……orz　俺が話しかけたのが悪かった、仕方ない秀吉に頼むか……

俺は別クラスへ行き、そして秀吉を呼んだ。

秀吉「なんじゃ　何かようかの」

勇一「実は姫路さんの恋を实らせよう」と

秀吉「相手は誰じゃ？」

勇一「明久を」

秀吉「おおーこれはまた　どうして」

勇一「姫路さんは明久のことがきつと好きなんだよ！だから告白大作戦！をしよう」

秀吉「また大胆に……」

俺は1年前に雄二と霧島さんをラブラブ大作戦をしたが見事に失敗



俺はこんなこと言ってもいいのか、なんかいつも俺じゃない気がするが言ってしまった以上やるしかない！……ちよつと冷や汗と焦りあらわに出てきた。

それから2日後、俺が考えて作った恋愛シナリオルト、姫路さんは本当に覚えてきたのかな。俺は校門で待っていると姫路さんが駆け足で来た。

姫路「おはようございます」

勇一「おはよう姫路さん、シナリオ覚えて来た？」

姫路「あっ！はい 大丈夫です」

勇一「よし！作戦実行だ」

その前に説明をしとかないといけない、簡単に言うと

ステップ1・明久と偶然あって一緒に登校、そして邪魔者は俺と秀吉で排除する ステップ2・ペンをさりげなく明久に気づくように落とし、タイミングを見て触れる感覚で取る なお邪魔者は排除  
ステップ3・体育の授業でさりげなく明久に接触 邪魔者は排除  
ステップ4・姫路さんの弁当を明久に食べさせ……

勇一「明久——！！、だ……誰にやられた！」

明久「うぐうぐうぐう……がくっ」

勇一「明久——！！」

俺は倒れてる明久の体を持って叫んだ

秀吉「やれやれ」

ひ……姫路さんの弁当は恐ろしい！……とハプニングがありつつ

ス……ステップ……5

たまたま明久を見つけ近くなったら姫路さんを押してぶつける！……これは姫路さんには教えてないけど

ステップ6・明久を屋上に誘う

そしてステップ7………っていつの間にかすでにステップ7まで……

………そう告白の時

ここまでいくつかのハプニングがあったけど今回はいける！

姫路「あ……明久君……私……」



明久「ひ…姫路さん…」

これは……

姫路「私…好きです！明久君のことが！」

明久「姫路さん！」

秀吉（これは決まりじゃな）

ああ  
そうだな  
勇一

俺と秀吉は屋上行き階段のドアでこっそりと見ていた。ここまで来たらもう見なくても大丈夫だろ、（あとは外部の人に任せるよ）すると階段の下から声がした。

？「勇一！——！」

俺と秀吉は声ができる方に顔を向けた。

？「お前を殺す！」

勇一「なんか雄二が追っかけてきた——！」

秀吉「よっぽど恨みがあるんじゃない？」

勇一「仕方ない、あの人と呼ぶか」

秀吉「呼ぶって誰を？」

俺は指を鳴らし、ある人と呼んだ、それは屋上行きの1階段前に現れた

雄二「なっ！翔子！なぜお前がここに！」

霧島「……ある人から雄二を止めるように言われた」

雄二「くそっ！絶対殺す！」

霧島「……だから雄二、私と結婚しよ」

雄二「うわあああ！く、来るな——！」

雄二は霧島さんに追いかけて逃げて、雄二：お前とは一生悪友だ、俺は外面を笑顔、内面はえげつない悪い顔で雄二を見送った。  
そして下校の時

勇一「はあくなんだが疲れたな」

秀吉「今日は半日中頑張ったからじゃな、お疲れさんじゃ」

勇一「ありがとう、秀吉」

？「……お主、秘蔵写真はいらんかね」

勇一「!その声は!」

秀吉「ムツツリーニ!」

ムツツリーニって言うけど本名は土屋康太、ただのムツツリスケベ  
けどいいやつ土屋「……勇一の好きな人はこれ」

こ…これは!あ…梓のメイド猫耳、そして希のスク水、涙ねえの猫  
耳メイド、猫耳体操服の桐乃 も……萌え!!!!!!

勇一「この4枚いくら!」

土屋「……2000円で交渉」

1枚500円……背にはかえられない

勇一「4枚買った!」土屋「……成立!」

秀吉「全く、勇一は……」

俺は秘蔵写真をゲット……ってこんなの梓と涙ねえと桐乃に見せ  
たら怒られる、見つからないように隠して置かないと、

そして1週間後、梓 と桐乃と涙ねえに秘蔵写真が見つかって激怒  
されたのは言うまでもない………END

## バカテスルート（後書き）

ラジオ的なミニトーク

2次元美「こんにちは 原作者2次元美女っ子です」

明久「名前長いよ!」

2次元美「おお!今日のゲスト」

明久「初めまして 吉井明久です」

2次元美「よしっ!本題に入るか」

明久「切り替えはやっ!そして何も触れずスルーかよ!」

2次元美「今回はバカテスルートだけど まさかの明久と姫路さんが恋人になるなんて夢の話しだな」

明久「ちよつと夢で終わらせないでよ!たまにはしたっていいじゃない……ってあれ?2次元美さん?」

F F F 団「吉井明久をく殺せ!!!」

明久「げっ!異端審問会のみんな!」

須川「判決を下る、とつとと死刑!」

明久「た、助けて」

2次元美「まあ巻き添えされたくないから避けておこう、なんかしょうもない回で始まったけど 見て読んでいる人達よ、楽しくいこうぜ!」

明久「助けてく神様」

2次元美「では次回もゲストを招いて会いましょう」

F F F 団「吉井明久は裏切り者じゃ!」

## とある魔術ルートを（前書き）

こんにちは 2次元美少女っ子です

今回はとある科学を出したんで魔術も出してみました

でも登場キャラはたった数人 科学メインは4人だけど

魔術メインは2人ぐらいで

僕もとあるシリーズは全部見ました

ホント面白いし、シリアスですごかったと思います

とある魔術ルートは勇一とインデックスと当麻のそんな絡みです

上条の字が間違っていますのでお願いします

## とある魔術ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・7話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？「もしかして勇一？」

勇一「はい？」

俺は振り向くとそこに美少女の学生がいた。髪が長く緑色の瞳に薄青髪のちよつと小さい女の子

？「やっぱり勇一だったね」

勇一「あゝ誰ですか？」

その後、沈黙が続き彼女が言い返して来た。

？「誰ですかじゃないよ！！ インデックス！ 上條インデックス！」

勇一「あゝ！ インデックスかゝ、って上條！」

インデックス「そつ、私 上條という名字で登校してるから」

インデックスは自信満々とした。そんなバカな！ 1年前は普通のインデックスだった、

インデックス「あと言っておくけど、料理、掃除、弁当作り、当麻やスフィックスの世話など自分で出来るもん」

なのに、俺が知ってるインデックスなわけがない！

勇一「と……ところで俺になんの用？」

インデックス「あ！ そうだった 勇一に相談があるの」

まさかこれって人生相談！（俺妹キター——！！）

というのは冗談で、昼休み時間はインデックスと一緒に弁当を食べるのだが……

インデックス「さゝてと、お弁当ゝお弁当♪」

屋上にはよくあるベンチが、1つや2つそしてベンチに座りそこで弁当を食う。

勇一「なんだか嬉しそうだな」

インデックス「うん、だってお腹空いたんだもん」

インデックスは鞆から弁当を取り出そうとあさっているが

インデックス「あれ？…ない！ない！私の弁当！」

勇一「おいおい、しっかりしろよ」

インデックスが潤い涙をしていると屋上ドアから上條当麻が包んだ物を持って来た。

当麻「ここにいたかインデックス」

インデックス「うゝ当麻」

当麻「お前が忘れてると思ってほら、持って来てやったぞ」

インデックス「当麻！ありがとう」

当麻「それじゃ俺は行くからな」

結果的に当麻は忘れてた弁当をインデックスに届けていたってことかな、

勇一「なあ、俺に相談するんじゃないのか？」

インデックス「あ！そうだった、また忘れてた」

勇一「やれやれ」

インデックスは弁当食べながら俺に話した。その内容は、インデックスの友達や当麻のこと、スフィックスのことなどいろいろ話してくれた。その時のインデックスの顔は笑顔でいた。俺は今まで振り回され来たけど、やっぱ1番は笑顔を女の子かな……………なんて思ったりする。

インデックス「勇一！私の話し聞してる？」

勇一「！？うん、聞してる聞してる」

インデックス「本当に？」

勇一「本当だって」

インデックス「あっそ、それじゃ勇一放課後時間ある？」

勇一「うゝん、確かにあるけど」

インデックス「本当！？それじゃ放課後校門で待ち合わせだよ」

勇一「あいよ」

というわけでインデックスと約束しました。インデックスは楽しそうにしてたけど一体何の用なのかな

午後時間が過ぎて放課後

俺は待ち合わせの場所、校門へと向かった。すると本当にインデックスがいた。それは彼女が彼氏を待っている姿……を想像する

勇一「インデックス〜！」

インデックス「あ！勇一」

勇一「俺を呼んでどうすんの？」

インデックス「ふっふっふ〜実はセブンスミストに買い物するんだけど勇一が決めてほしいの♪」

勇一「おいおい、それぐらい自分で出来るだろ！」

インデックス「だって私だけじゃ決められないんだもん」

そして校門から歩いて20分、セブンスミストに着き、さっそく洋服店を見た。

インデックス「ねえねえこの服可愛い！ね」

勇一「本当だ！この服インデックスが来たらより可愛くなるんじゃないか？」

インデックス「そ……そうかな」

勇一「試しに着てみたら？」

インデックス「勇一が……そう言うだったら着てみる」

インデックスは頬を赤らめて店の服を持って試着室に入った。さてこっからが女の子の試着が妙に長い時間だ、この間に何をするかな

インデックス「きゃー！」

勇一「！？インデックス！」

俺はインデックスの悲鳴を聴いてダッシュで試着室に行ってカーテンを開けた。するとそこには学生服は脱いでて試着服はまだ着てない状態（いわゆる今下着だけ）

え？まだ着てない？しかもピンクの下着……カワイユス！

インデックス「な……な……」

勇一「いや……その……これは……」

インデックス「なに見てんのよ！この変態お馬鹿！」ガブッ！

勇一「ぎゃああああ——！！！」

そして俺はベンチで座っていた。それはショックが大きすぎて落ち込む姿だった

勇一「はぁ〜」

たくっ、俺は一体何をしてるんだ！自分が情けない……俺は顔を上げ店内の周りを見始めた。するとなにやら年の差の男女2人がいた。同い年ばい銀パーの不良少年とちっちゃくて妹みたいな可愛い女の子、俺はその2人の会話を目で見ていた。

打ち止め「早く早く〜急がないと遅れちゃうってミサカはミサカは急ぎのおねだりをしてみたり」

一方通行「だったらお前だけ行けばいいだろ！」

打ち止め「ミサカはアクセラレータと行きたいってミサカはミサカはだだをこねてみたり」

アクセラレータ「チッ！だからガキというものは」

2人はそのまま進行方向変えず行ってしまった。

勇一「なんだあの人」

俺がそう思っていると前から当麻がやってきた。

当麻「よっ！勇一、何してんだ？」

勇一「あ！当麻、……実はインデックスの私服を買ってあげようとしてただけどちょっとトラブルがあってインデックスの下着を見失ってしまい、怒らせてしまったんだ」

すると当麻は俺の肩に両手を置いた。



当麻「お前も苦労してるんだな」

まあ当麻に比べたら少ない方だけど………と思っていたらポケットから着信メールが来た。内容は

インデックス「服着替えた」とのメールが

勇一「着替え終わったか………そうだ当麻も一緒に見てこう」

当麻「そうだな………一応保護者のようになってるからな」

てなわけで会ったばかりの当麻と一緒にインデックスの場所まで行った。

勇一「インデックスへ来たぞ」

俺が呼びかけると試着室のカーテンが開きインデックスの姿を見た。

インデックス「ど………どう？」

インデックスは顔を赤く照れているけど俺と当麻もインデックスの可愛さに照れている（※服のイメージはおまかせします）

当麻「可愛い……」

勇一「可愛い……可愛いよインデックス！」

インデックス「本当に！ありがとう　じゃ私これにする！」

買わせる気満々　だからといって断ればそこで子供のようにだだこねて面倒くさいことになるから、仕方なく買うことにする

インデックス「てか　当麻いたんだ！？」

当麻「ああ　ちょうど会ってな」

さて値段と………！！高！まじかよ！そんなにすんの！

勇一「と………当麻………これ」

当麻「ん………？、うぐっ！」

この値段は恐るべし高い

（※値段の高さはおまかせします）

インデックス「？　どうしたの」

当麻「ご……ごめん、俺用事を思い出してさ………」

俺は当麻が逃げるようだから手をつかんだ

勇一「当麻！ここまできて逃げるなんてないよな」

当麻「うぐぐぐ………はぁ～不幸だ」

というわけで俺と当麻は結構高くて綺麗な服を買うことにした。本  
当に高すぎた……

そして帰り道

インデックスは嬉しそうに買ってもらった服（入れ袋）を持っていた。

当麻「たくつ、俺まで巻き込むなよ」

勇一「ごめん、けど仕方ないんだ あゝゆゝのは」

当麻ホントにごめん でも当麻の分があったからこそ買えたんです  
けど

そして分かれ道

当麻「それじゃ 俺とインデックスは右側だから」

勇一「ああ 俺は左側っ」と

インデックス「勇一 今日はありがとうね、当麻も」

当麻「ふっ、い……いくぞ」

インデックス「勇一 バイバーイ」

勇一「じゃあね」

俺は2人を手を振って別れた。

勇一「さてと……所持金地獄の……始まりだ……ハッハッハッハ」  
END

## とある魔術ルート（後書き）

原作と小説ミニラジオ放送局

2次「こんにちは 前回は はっきりと公式を言ってなかったです  
でも今回から正式に始めたいと思います まあ説明やなんやらか  
は はぶいてゲスト呼びます。ではどうぞ」

当麻「どうも とある魔術からわたくし上条当麻と申します」

2次「ではさっそく質問です。上条さんはなんで女にモテるんです  
か？」

観客からお——！

当麻「な！俺が知るかよ！」

2次「ずるい！インデックスや御坂さん、上条さんが知ってる周り  
の女性からも上条さんに求めるじゃないか！」

当麻「知るか！俺は悪くないんだ——！」

2次「あ！逃げた！」当麻「もう本当に不幸だ——！！！」

2次「たくっ………まあこんなぐわいでやっていきますのでまた次  
回会いましょう」

## **A n g e l   B e a t s !   ルート（前書き）**

A n g e l   B e a t s !   完全まで長かった  
上手く出来たかは毎回不安に思ってます

だが今回はA n g e l   B e a t s !   ファンにとって  
岩沢さんを出しました  
では   どうぞ

## Angel Beats! ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・8話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？「そのあんた！」

振り向くとそこには赤紫色の髪にリボン付きカチューシャの女の子がいた。なんかにやっそこっちを見ている

勇一「俺ですか？」

？「あんた以外誰がいるのよ」

勇一「ていうか あなたは誰ですか？」

？「私？私は仲村ゆり SSSの1人よ」勇一「SSS？なにそれ？」

ゆり「死んだ 世界 戦線、略してSSSよ」

勇一「死んだ 世界……ってすでに死んでんじゃない！」

ゆり「あ！間違えた、死んでない 世界 戦線だったわ、なんか前にこんなのがあったような気がするわ」

勇一「なに勝ってに納得してんだよ!!」

全くどいつもこいつも俺がツッコまないときがすまないのかよ！

ゆり「そんなことよりあんたをSSS団員に入れてあげるわ」

勇一「え！」

こうして俺は無理やりそのSSS団員とかに入ってしまった。

（部室）

俺は妙な部屋に入った、だがそこにはいろんなやつがいた。いつでもめっちゃ人数が多い、長くなりそうだから簡単に教える。

SSS（死んでない 世界 戦線）メンバー

音無結弦 日向秀樹

この2人は俺をサポートしてくれるらしい

高松 野田 遊佐 藤巻 TK 松下護驊 大山

この人達はいろいろとわからない人

竹山はテレビでみる平成〇〇〇院のマスコットみたいだけど可愛くない

隅にいるのは椎名、なんかスカートのなをつけて「あさはかなり」と言ってる

あと学生帽をかぶって生徒会にみえそうな直井文人

なんか偉そうにして自分は「神様だ、ゴッドだ」とか名乗ってる

そして静かに音無の隣でゆりの話を聞いている立華かなで なんか可愛い

この間 生徒会をやめたがまた復帰したという噂があるらしい  
最後に俺を無理やり誘った仲村ゆり

自分気取りでしかもリーダー、逆らう者には罰を与えるとか

俺はぼーぜんと大きな部室を広く見ていた。

ゆり「あんた達 新入部員ファーストミッションをするわよ」

突然部屋暗くなり正面にモニターが映し出している、そこで大山が俺を気遣い日向の隣イスに座らせた。

日向「ファーストミッションって俺達初めてじゃないよな？」

ゆり「そう けどあんまり細かいことは気にするな！」

日向（本当だったら気にするんだが！）

ゆり「なんせ 新入部員勇一君が入ってくれたんだもん」

俺は無理やり入られたんですけど！！

音無「それで俺達は何をするんだ？」

ゆり「ふっふっふ」 見て驚きなさい！、聞いて驚きなさい！、触って驚きなさい！」

いや、触ることは出来ないから

ゆりが提案したのはモニターに表示されている

「Girls Dead Monster に入ってライブを盛り上げよ!!」

え!ライブ!

勇一「あんたらちゃんと授業受けてんの!?!」

ゆり「当たり前じゃない、でなきゃここにいる意味がないでしょ」

野田「で、俺達はどうすればいいんだ ゆりっぺ」

ゆり「それは後で教えるわ」

野田「だよ!新入りさん!、ゆりっぺの作戦守らないとお前の首、落とすぞ!」

勇一「は…はい!」

先に なんで武器を持ってるの? を聞きたかったけど、野田の武器「ハルバート」を俺に向けているから言えなくなった。てか言ったら怒られそう

そして作戦決行の日、俺はGirls Dead Monster略してGldemoのメンバーとして一時的に入り、俺の役目はGldemoと一緒にライブを盛り上げること。てかてかなんでGldemoのメンバーに!?!

く体育館く

勇一「は…初めまして天川勇一です。よ…よろしく願いします」

岩沢「私がGldemoのリーダー岩沢まさみだ 担当はボーカル&リズムギターをやってる、そしてGldemoのサブリーダーでリードギターひさ子だ、」

ひさ子「よろしく」

岩沢「そんでベースのしおりにドラムのみゆき」

しおり「よろしくね」

みゆき「よろしくね」

勇一「どうも、」

岩沢「あとはアシスタントの………」

ユイ「ドオオオリヤヤー!!!、私Gldemoのアシスタント

ユイで——す!!」

岩沢と話しているとき体育館入口から赤ピンクの髪に若干デビルコスチュームのはしゃぎ女の子が走ってきた。

岩沢「あ、ユイ 来たんだ」

ユイ「はい!先輩!予定通りの時間に来ました」

アシスタントのユイかゝめちゃくちゃテンション高いな

岩沢「というわけだ、話はやりから聞いている お前は一時的Gldemoのメンバーで担当はサイドギターでもやってもらおう」

勇一「え——!!俺もやるのかよ!!」

ユイ「おい!このクソ新入り!岩沢先輩の命令は絶対なんだからな!!」

俺は結局やるはめになった。とゆうかユイってやつなんか生意気だな!

翌日から特訓の日がここ何日が続いた。

このGldemo、軽音部に似てないか?だってそうだろ!ギターがありベースやドラム、あ!鍵盤がなかったか?などと現を抜かしていた。

〓屋上〓

音無「なあ日向」

日向「どうした音無」

音無「勇一 大丈夫かなって」

日向「大丈夫だろ あいつはすぐ根は言わないだろ」

かなで「日向君の言う通り 勇一君は頑張れる人だから」

直井「そうです!音無さんが心配するほどでもないです。……………」  
でも僕は音無さんを心配しますけど」

日向「立華と直井 いたのか」



？「俺達もいるぜ！」

音無「藤巻 高松 大山 松下護驊 TK 野田 椎名 来てたのか！」

藤巻「あいつならやれるさ」

大山「僕達が出来ないことを」

高松「彼ならやってくれるはずです」

松下「俺達は見守ることしかできない」

TK「Let's music！」

野田「新入りには興味はないがゆりっぺのためたからしかたがない」  
椎名「あさはかなりく己自身で磨く」

日向「なんでお前らまでいるんだよ——！！！」

そしてライブ当日、生徒は体育館に集まっていた。なんで集まっているか？それは学校終了後に突然スピーカーから生徒会長かなでの声がしてみんなを体育館に呼んだ。

俺とGldemoメンバーは舞台上で最終チェックを始めた。岩沢先輩はボーカル、ユイがリズムギター、ひさ子先輩はリードギター、俺はサイドギター、しおりはベース、みゆきはドラムという配置になった。準備万端、みんなに教えてくれたこの演奏無駄にしてたまるか！

そして幕が開き、拍手が一斉に鳴り響き生徒全員拍手を止めた。岩沢先輩がマイクを持ってみんなに言った。

岩沢「みんな、今日は集まってありがとう、実はみんなに伝えたいことがある それは……………」

生徒全員は少し緊張が走る。

岩沢「それは、Gldemoがこの学園に復活するという宣言をする——！！」

岩沢さんの言葉を聞いた生徒は大盛り上がりになった。みんなの声援はライブみたいに喜んでいた。

岩沢「みんな、ありがとう 今日からGldemoの活動を行うと

して演奏する 聞いてくれ「Crow Song」

曲が始まり生徒全員は大フィーバー！……ところでなんで復活ライブなのか、それは、岩沢先輩とひさ子先輩がまだ中学のころ、昔Gldemoのメンバーが犯罪を犯した原因で3年間廃部になった、それをすごい生徒会メンバーが解決しわずか1年半で、しかも廃部だったGldemoを復活させる力 恐るべし生徒会、この日は復活ライブを3時間演奏をやった。

そして次の週 SSS部

俺は校長机と席に座ってるゆりに拳を力を込めて机を叩いて怒った。

勇一「結局 俺のためのミッションじゃなくてGldemoを復活させるためじゃないか！」

ゆり「当たり前じゃない、Gldemoを復活させ我がSSS部のため知らしめるのだから、良かったじゃないあなたもGldemoも力に加わったんだし」

竹山「全く人騒がせな人です」

勇一「何もしてないメガネ野郎が言うな！」

竹山「メガネ野郎ではありません 僕のことをクライシ……」

ゆり「はいはい、以上もちまして今日のところは終了」

ゆりは立って俺を通り過ぎて部室から出でった。

竹山「では僕はこれにて失礼」

……………

勇一「はあ」

俺はため息をつき部室を出た。全くゆりは本当に自己中だろ、

？「別にいいじゃないか」

勇一「ん？音無」

音無「だって俺達はただ見物で見守ることが役目だったんだし、まだお前の方がいいぜ」

勇一「うう、確かに Gldemoを復活出来たのは俺も嬉しいんだけど」

音無「なら、ゆりのことは気にするな」

そう言って廊下にいた音無は俺に背を向け去って行った。  
そしてとある廊下にて

俺が廊下を歩いていると後ろから話かけられた

かなで「あ、勇一君」

勇一「お！かなで　ずいぶん重そうな資料持っているけど手伝おうか？」

かなで「ううん、大丈夫　これぐらいなら私でも出来る」

勇一「そうか」

かなで「あのね　勇一君、」

なんか頑張って資料持つてるかなでは可愛いな

かなで「この前はお疲れさま」

勇一「?：あ、ああ　ありがとう」

かなで「では勇一君、また……………後で」

勇一「おう!？」

かなで……………今何か伝えたがったきがするけど気のせいかな

結局俺はまた歩きそのまま帰った。

END

## Angel Beats! ルート（後書き）

2次「小説ミニラジオ放送局」

2次「なんか毎回 名前変わっている気がするが 内容は全部一緒さ、今回のゲストAngel Beats! からかなでさんです」  
かなで「こんにちは 皆さん」

2次「ギター!! (≧▽≦) かなでマジ天使! 佐天さんマジ佐天使」  
かなで「佐天使?」

2次「う!! ごはあっ! ……何でもない、ではさっそく数枚のハガキを紹介しますか」

かなで「楽しみ」

2次「ペンネーム・キリリンシ……ごはあっ!」

かなで「大丈夫?」

2次「すまん 取り乱した、内容は『イヤッホー! キタキタキタキタキター! かなでちゃんマジ天使!! 一度でも誰よりもかなでちゃんに会いたい! でなきゃマジ殺す!』ってただの要望じゃねえか! しかも最後には反逆者になってるし!」

かなで「私のためにハガキを書いてくれる人がいるなんて、私嬉しい」

2次「あんまり誤解しない方が身の安全だと思うけど………ところでかなでは音無と付き合ってるの?」

かなで「ガードスキルハンドソニックバージョン1」

2次「きゃあああ!!」

かなで「結弦とはまだ付き合っていないわ」

2次「ご……ごめんなさい!、もうこの話題には触れませんかから許して下さい!」 かなで「もう……恥ずかしい」

2次「収めてくれましたか………俺の命がSSS（死んだ世

界 戦前）に行く前に早くこの場を閉めよう………では皆さん次回  
は「生徒会の一存×コラボ作品」  
次が最後のルートなのでお楽しみ」  
かなで「また会いましょう」

## 生徒会の一存＋生徒会長ルート（前書き）

どうも 2次元美少女っしょです

いよいよルート版も最終回 長かったな〜初めの考えと今の考えは違っていて自分でもすごいと思います  
ではルート版最終回 4・9話どうぞ

## 生徒会の一存十生徒会長ルート

「俺の姉妹達の憂鬱」

### 第4・9話

教室に向かう俺に1人の女の子が声をかけて来た。

？「ねえ、もしかして勇一君？」

俺は振り向くとそこにはだてメガネぼいメガネをかけていて資料的な物を抱き抱えていた女性

勇一「ん？あれ！和ちゃんじゃないか」

和「お久しぶりね勇一君」

勇一「おー、今日はどうしたの？」

和「あのね、勇一君に頼みがあるんだけどいいかしら？」

まさか和ちゃんが俺に頼みがあるとは珍しいな……………

勇一「いいよ、俺で良ければ」

俺の力を必要している人がいればその人に手を差し伸べたいくらいだ

和「実はうちの生徒会の1人が休んじやって人数が足りないの」

勇一「まさかそれって、俺が代わりに出ろってこと？」

和「あら、察しがいいわね それじゃお願い出来るかしら？」

勇一「まあ和ちゃんのお願ひならやってあげるよ」

和「本当に！？ 助かるわ、じゃさっそく行きましょう」

俺は和ちゃんと一緒に生徒会室に行った。生徒会室に入る前、俺は生徒会のイメージを想像した。

多分、賢くて頭が冴えてるし、和ちゃんみたいな人がいるかもしれないと思った。

廊下を歩いて5分後、やっと生徒会室、和ちゃんが戸を開き中に入った。後に続いて……………

和「みんな、代理連れて来たわよ」

その中には……………

読書をしてる生徒会副会長・椎名深夏とPSPゲームを夢中でして  
る生徒会会計・椎名真冬、この2人は姉妹らしい　姉が深夏で妹が  
真冬

そしてなんかまじめに話合っている生徒会書記赤葉知弦と見覚えが  
ある2人、白髪で天使のような可愛さと1人だけ生徒会帽を被って  
えらそうな雰囲気をしてる……………そう

立華かなで（天使ちゃん）と直井文人と、

小学生みたいな人、一応生徒会長の桜野くりむが副会長杉崎鍵にだ  
だっている姿を見た。

勇一「和ちゃん、俺一回出ていいかな？」

和「え？別にかまわないけど」

俺は外に出て一回改めてまた入る、すると

勇一（やっぱり何にも変わらねー！）

やはりこれが現実だった

和「みんな、今日の代理は勇一君だからしっかりお願いね」

……………

くりむ「では今日の議題『夏に向けて大人の魅力を作り出そう！』」  
くりむがあーだこーだ言っている間、俺はかなでと直井とこっそり  
話すことにした。

勇一「また、会ったね　生徒会どんな？」かなで「特になにも　く  
りむちゃんが可愛いくて面白い」

直井「たがやつ・杉崎には気をつける　杉崎の女子目には恐ろしい  
力が」

杉崎「ちょっとー聞こえてますよー」

くりむ「言うからにして大人への道と言うのはね……………ちょ



つとそこの3人なにこつそり話してんの！」

直井「小学生が何を言っている（笑）」

くりむ「私は小学生じゃない！立派な高校生なんだよ」

勇一「高校生の割りには背が低くないか？」

俺と直井はくりむの禁止ワールドを言ってしまった。そしたら

くりむ「う、うえゝゝん 知弦ゝゝ直井と勇一が身長のことでもバカにするゝ」

知弦「はゝいよしよし、赤ちゃんはそのままの方がずっーと可愛いわよ」

くりむ「それ、フォローになってないよ」

くりむは泣きな目で助けを求めていたがどうやら違っていた。

知弦「直井君、勇一君、赤ちゃんはね中学の頃からずっーと伸びない人生を送っているのよ！」

くりむ「やっぱりフォローになってないよ！」

深夏「とゆうより今日の会議はテーマを決めるはずじゃなかった？」

深夏が本を読み終わった後、本題に戻した。そして深夏の疑問は真冬に回した。

真冬「はい、真鍋先輩が提案したんですけど、あの人達があれだと………」

真冬があの人達と指摘する人、杉崎やくりむ、知弦さんや直井と俺を含んだ人達だろ

和「全く 話を聞く耳持たないわねゝ」

和ちゃんが席から立ちくりむの横に行った。

和「はゝいみんな聞いて、今日は夏に向けて生徒全員が涼しくなれるテーマを考えていきたいと思います。中身の方はまた改めて教えるわ、勇一君は今日代理だからテーマだけ考えればいいわ」

勇一「わかった」

さっきまでごじゃごじゃだった生徒会室が落ち着いた雰囲気になった、さすが和ちゃんやるねー！

だがせっかく和ちゃんが作り出した生徒会雰囲気がこの後崩れていくことになる

和「では個人のテーマを発表してください 挙手をお願いします」

杉崎「はい!!」

和「はい、杉崎君」

杉崎「涼しくなるテーマそれは、みんなで水着に着替えよう!（女子限定）」

深夏「なっ! そんなことが出きるか! だいたいなんで女子限定なんだよ!!」

くりむ「そうだよ杉崎! そんなの却下だよ!」

杉崎「何言ってるんですか! 女子は水着を着ることでより美しくなるのさっ!」

和「そ、それはちよつと……………」

勇一「水着ってスク ミズ?」

杉崎「確かにスクミズもいいけどやっぱりビキニ水着の方がベスト!」

深夏「ふざげんなー!!」

深夏のハイキックが杉崎の顔にヒットし

杉崎「ぐはあああああ!」

後ろの方まで飛んだ。

和「あははは……………（笑）確かに不採用だわ、それじゃ次の挙手の方どうぞ」

かなで「はい、」

和「はい、立華さん」

かなで「夏場は暑いと思うので、冷やしタオルや水筒など持ってくるのどうかしら?」

お! まともな考えが出てきたぞ

くりむ「さっすが! かなでちゃん、杉崎とは大違い」

直井「僕もかなで会長さんに賛成です」

真冬「それはとてもいい案ですね」

和「ではまず候補としてあげましょう」

和がノートに候補を書き始めた。ノートには「立華かなで 冷やし  
タオル、水筒」って書いてあるのをちよつと見た。

和「では他に挙手を」

真冬「では私の番ですね」

真冬ちゃんが手をあげて立った

真冬「私の案はまず杉崎先輩が愛人である中目黒先輩と……………」

杉崎「やめて——真冬ちゃん！」

勇一「ごめん真冬ちゃん、それってBL思考に入ってるから無理だ  
と思う」

真冬「え——！これからまだまだ杉崎先輩と中目黒先輩があんなこ  
とや（やめて——！）こんなことの（俺のハートのガラスが！）続  
きがあるんです！」

深夏「真冬、それ以上に言うのはやめなさい」

和「まあ……………そうゆうのは女子しか目にいかないわね」

知弦「ては私の番ね」

深夏が真冬のBLの話を切り止め、その後に知弦が案を出しにでた。

知弦「私が出すのはそうね、赤ちゃんかしら」

くりむ「え？私？」

知弦「赤ちゃんを可愛いスクミズに着せて夏のイメージキャラクタ  
ーとしてみんなに癒やしていくのよ〜ね〜赤ちゃん」

くりむ「あ〜ん／＼知弦やめてよ〜」

知弦「もきゅっ？」

なっ！なんだ今の もきゅっ ってニュー〇イプなのか！

と俺は親の目のように生徒会みんなをみていた。

和「そうえば勇一君は何か案はあるのかしら？」

勇一「え！俺？ 俺はいいよ 全然当てにならないし」

くりむ「そんなこと言わずに」

深夏「教えてなさいよ」

和ちゃん一言から言われて、みんなが見てきた。

勇一「それじゃ……………扇風機やクーラーとかつけたらいいんじゃないかな？」

和「扇風機とクーラーね、まあ一応候補としてあげとくわ」

深夏「なんだ　いたって普通じゃん」

くりむ「なくだ、つまんない」

俺に何を求めているんだ!？」

とそんなことを思っているが生徒会も楽しめるところもあるんだな、イメージ的には雑談みたいに会話があるけど　この生徒会は違う、この生徒会は

くりむ「それじゃ今日はこの辺でお開きということであいつものあれで閉めよ」

違う「そうね」

深夏「もう帰る時間だし」

真冬「やりましょう、かなでちゃんも」

かなで「わ…………私も？」

くりむ「せーのっ」

くりむ・知弦・深夏・真冬・かなで「今日の生徒会　これにて終了!」

5人が同じポーズをして、なんか可愛い

俺は今日の生徒会代理終え、みんなと別れ　生徒会室を後にし帰ることにした。すると掲示板に金髪の生徒女子がいた。彼女はまた新しい広告を貼っている。

勇一「何やってんだリリシア」

リリシア「あら、勇一君　今新しい記事を張り終えたところよ」

リリシアは毎回記事をよく更新している。今だって新しい記事を貼ったんだから、えーと内容は「大発見!　生徒会室に変態男子副会長とBL好き会計とナルシスト副会長男子と子供がいた!」

リリシア「これで生徒会の評判ががた落ちだわ」

一体 生徒会をどうしようとするだく？ 啞然と掲示板を見て思った。

勇一「それじゃね リリシア」

リリシア「ええ、では」

リリシアと別れようやく家に帰ることに出来た。

勇一「にしても変わった生徒会があったもんだな」

END

## 生徒会の一存＋生徒会長ルート（後書き）

小説版ラジオ放送局！

2次「はーい こんにちは、この作者2次元美少女っしょです 今回で第3回目です。さて次のゲストは誰か呼びいたしましょう 生徒会の一存からこの人です、なにげに生徒会長 桜野くりむさん くりむ「ちよっと！なにげには失礼でしょ！！」

2次「いやーだってこんな小さくて可愛い女の子が生徒会長なわけがないじゃん」

くりむ「それって褒めてるの？バカにしての？」

2次「どっちでもよくなくくない？」

くりむ「なにその言い方」

2次「ではおはがきコーナー いろんなユーザー作者からハガキとして読んでいきたいと思えますけど、届いたのは1枚だけ」くりむ「ではさっそく読もう」

2次「OK ではハガキ1枚からペンネーム「天使ちゃんは俺の嫁 異論は認めない」さんから……………って自分だけの物にするなよ、

……………

「こんにちは勇一君、2次元先生 さっそくですが内容…ゴホン

自分はやっぱりAngel Beatsですね そしてAngel Beatsといえば天使ちゃんこと奏さん！ あの子は可愛過ぎですよ！何あの可愛さ…俺を萌え殺したいんですかね？ でも音無くん誘われてSSSメンバーと分かり合えて…良かったな…っと言いたいことはまだありますが…またいつの日か と言うわけで天使ちゃん、ユリッペをorder お願いします あ、出来れば直井さんに一言「僕は神だ」と言って下さい」

…ですかっ！お！天の神から手紙が来た」

くりむ「え？何々」

2次「まずはユリッペさんから、一言紙に書いてある 「あたしを応援するんだったらSSS団に入りなさい！」と、かなでさんから「いつも 応援ありがとう 私からは大好きな激辛マーボー豆腐を送るわ」

あと直井さんからもある 「僕は神だ」 本当に一言だ。

まあなんだ楽しく行こうぜ

くりむ「なによそれ」

2次「ではみなさん次回はちょっとお休みです 次はDOGDAYSです ではみなさんDOGDAYSで会いましょう」

## 夏の外出旅行（前書き）

どうも 2次元です

「俺の姉妹達の憂鬱」久しぶりに更新です

今回は夏休みなので夏休み編を書いていきます

前回の話とは一気に飛びますので

要注意です



## 夏の外出旅行

「俺の姉妹達の憂鬱 5話」

青空に輝く 灼熱の太陽に晴天の霹靂 こんな蒸し暑い時期になっ  
たもんだ！

春の4月、普通の5月、梅雨の6月、夏始めの7月、そして夏本  
番で夏休みの8月

今俺はここにいます！ というのも俺達天川家は  
海辺の別荘に居て、海で遊んでるんだ。3年の涙ねえ、1年の梓と  
希、そして今はここにはいないけど2年の桐乃、桐乃はティーン誌  
のモデルをやってて外出中

ある意味つらいよ 3人の姉妹と1人の女の子を相手にしないと  
いけないのだから、それにしても彼女達の水着がまぶしい

涙「ん？ 勇一なにしてるの」

梓「お兄ちゃんも早く遊ぼうよ」

希「…………」こくこく

勇「はいはい、すぐ行くって」

これは幸福か不幸かは彼女達次第できまるな

梓「ねえ 桐乃お姉ちゃんはいつ頃こっちにくるの？」

妹・梓は俺に桐乃のことを問い始めた

勇「ん？ だいたい夕飯の頃にはくると思うし迎えはあっちの方でし  
てくれるし」

涙「なるほどね、桐乃ちゃんはきつとスターモデルになれると思う  
よ」

希「桐乃のスタイル いい」

梓「桐乃お姉ちゃんがこっちに来るまで長いな」

勇（俺は姉妹達の相手をしなくてはならないのか！）  
梓が言ってることは違う思いを言った。

涙「それじゃ 今から遊びますか!!」

梓・希「おー!」

勇「お」

言い忘れてたんだが俺達がどうしてここにいるのかと言うと

先週、涙ねえと一緒に近くのスーパーに行った。そして買い物をしてくじ引き券をもらった。10枚、っていつから集めてたんだ？

それでくじ引き券を持って抽選会に行って涙ねえがガラポンを回した。5回分やったらティッシュばかり、でもそれから6回目は5等の商品券5,000分 7回目は4等のBBQ<sup>バーベキューセット</sup>、8回目、9回目はまたティッシュ、そして10回目で2等の海辺の別荘貸し切り旅行（家族のみ）2泊3日の券を手にした。涙ねえは強運!?

といったぐわいに俺達はここにいる。涙ねえが当てた商品はみなこの旅行の分としてつかわれるのさ

夕方16時

涙「んー! だいぶ遊んだー!」

梓「海で遊んでいるとなんだか疲れますね」

勇「確かにそうだな」

希「でも楽しかった」

勇「それもそうだな」

まあ夏の思い出は1つや2つあってもいいぐらいだな、これも涙ねえのおかげだし

涙「梓ちゃん どうしたの？」

梓「どうしたのって、何が？」

希「梓 真っ黒」

梓「え？……ええ——！！！！」

勇「確かに真っ黒 と言うことは真っ黒になるほど遊んだってこと」  
「すごいな——梓が着てる水着以外の皮膚が焼けてるし 焦げ茶色をしてる」

梓「別にいいじゃないですか！？」

涙「と言うことはあれだね 焦げにやんだね」

涙ねえ、俺が思ったことを言いやがった！

梓「なんですか！焦げにやんって！」

涙「あはっ 焦げにやんが怒った♪」

梓「もー——にや——！」

涙「きゃー♪ 助けて〜」

涙ねえが梓に追われて逃げていく……………

浜辺に残った俺と希、これからどうするかと言うと

希「勇一 ちょっと来て」

勇「え？何？どこへ行くの？」

希は俺の手を掴み、希が向かう場所へ連れていかれた。

（ここからは読んでる人の想像にお任せします）

帰宅後 俺と希は別荘の玄関に帰っていた。涙ねえと梓は先に帰ってたり着替えをしてたりしていた。着替えてないのは俺と希だけ  
勇「ただいま」

涙「おかえりー 遅かったけど何してたの？」

勇「え！ 別に何も ただその辺をぶらりと」

希「ぶらりと」

涙「ふーん じゃ2共、はやくシャワーを浴びて服にしかえて夕飯

作るんだから」

勇「わかったよ」

希「りょーかい」

涙ねえは俺と希をおいて台所へと行った

勇「それじゃ 浴びるか 希先浴びてこい」希「いいの?」

勇「ああ 俺は外のシャワーで浴びて来るから」

希「ありがとう 勇一」

希はそのまま上がり浴室に行った。俺は玄関を出て外に出てシャワーがある個室に向かうと、後ろから追いかける人がいた。

梓「お兄ちゃん」

勇「ん? 梓!？」

追いかけて来たのは梓だった、しかも手に持っているのは衣服

勇「どうしたんだ? 梓 こんなところで?」梓「はい 着替え」

勇「着替えて まさか梓はこの服を」

梓「そうだよ お兄ちゃん寒そうに帰って来そうだから風邪引かないように服持ってきたよ。後 タオルも」

勇「おお、ありがとうな梓」

梓「どういたしまして じゃ帰るね」

勇「ああ……」

梓は衣服とタオルを俺に渡して来た道に戻って帰った。

あっ……待ってくれないのか

俺は少し悲しく思った。

シャワー浴びた後、タオルで体を拭き、俺は梓からもらった服に着替え外に出た。もちろんカイパンを持って帰っているが、

勇「あ! 夕日が沈みかけてる と言うことはもうそんな時間か」早

いな」

夕日を見ながらそう言った。そして正面を向いて歩く。すると俺達の別荘の奥の道路上に止めている車を見た。その車から黄色髪をした人が出てきた

勇「あれ？　もしかして桐乃かな、だとしたら迎えに行かないとな」  
俺は急いで黄色髪の人とこへ軽く走りながら向かった

T O b e c o n t i n u e !

## 夏の外出旅行（後書き）

いかがだったでしょうか？

初めての天川家外出旅行

佐天さん（涙子）の強運がすごい！

あゝ早く竹達彩奈がやってるキャラ（非現実にいるキャラ）をだしたいなゝ

というわけで

意見や感想をずっーーーーと待っていますので  
よろしく

ラウラ&シャルさん 感想ありがとうございます、その他のユーザ  
ーもありがとうございます

## 姉妹の夕日・日和（前書き）

どうも2次元です

いよいよ桐乃が来ます

でも今後の展開はどういっていくのか未定です

今回の進行は夕方～明日まで

とのながれ 十分楽しんでください

## 姉妹の夕日・日和

「俺の姉妹達の憂鬱 6話」

？「本当にここでいいのかい？」

桐「はい ありがとうございます、もうすぐ着くので後は歩いて行きます」

？「桐乃、別に無理しなくてもいいんだよ？」

桐「無理なんかしていつてば あやせ」

勇「おーい おーい」俺は桐乃らしき人を見つけ声をかけた

桐「ちっ あのバカ！」

あれ？今なにか聞こえたような

勇「やっぱり桐乃だったんだ」

桐「なんで勇一がここにいるの？」

勇「いちゃ悪いのかよ！」

桐「あんたは家で留守番じゃなかったけ？」

勇「俺は飼い犬じゃね！ちゃんと涙ねえ達と来てるよ！！」

桐「ふーん まっ別にいいけど」

たくっ でもこれが桐乃というイメージを持ってしまった俺 暴言を言う姉姉ってなんかいやだな

あやせ「ねえ桐乃 この人は？」

あやせはマネージャーの車から降りて桐乃の近くによった

桐「あぁー こいつはあたしの姉で勇一」

勇「初めまして 天川勇一です」

あやせ「私は 新垣あやせです。いつも桐乃がお世話になってます



私と桐乃はモデル活動をしてるんです」

勇「ああ、そのことはだいたい知ってるよ」

あやせ「そうですか、ではこれからよろしくお願いします」

勇「こちらこそ」

あやせ「それじゃ桐乃、また今度で」

桐「うん、また」

マネージャー「では桐乃さん、予定の連絡が入り次第電話で伝えるから」

桐「はい、わかりました」

あやせを乗せたマネージャーの車は来た道に戻って行き、その車は遠くへと消えて行った。

桐「んじゃ、勇一、涙ねえ達がいる別荘まで案内して」

勇「ちよつとは言葉の聞き方直した方がいいよ!？」

桐「うっさい! 早く案内しろって!!」

やれやれ、どうして俺だけこんなかな

俺はあやせと別れた場所から涙ねえ達がいる別荘まで案内をした。そして涙ねえ達がいる別荘

へ玄関へ

勇「ただいま」

涙「もう勇一! また遅く……って桐乃ちゃんじゃない!？」

桐「た、ただいま」

涙「いつここに来たの？」

桐「ついさっき、勇一が迎えに来たから」

涙「それでまた遅くなったわけか」

勇「そうゆうこと」

涙「なら仕方がないか、さっ二人とも上がって上がって」

俺と桐乃は涙ねえに言われて上がる、そして上がったすぐ近くの扉

を涙ねえが開けた。そのさきは3歩進んだところにテーブルがあって食品がテーブル全体を埋め尽くすほど大量に置いてあった。

涙子・梓・希「じゃーん!!!」

桐乃・俺「おぉー!!!」

涙「勇一があまりにも遅いから先 作っちゃったから!」

勇「す、すまねー涙ねえ」

梓「さっ早く食べよう」

梓は俺と桐乃の肩を持って言って、テーブルにいかせた。そして5人で食事をした。

その後 食事を終え皿を片づける5人、

桐「さてと、じゃ涙ねえ あたしシャワー浴びるね?」

涙「わかった それじゃ私もついて行こうっと」

桐「な!なんで涙ねえまで!?!」

涙「いやー桐乃ちゃんのスタイルがどこまで成長してるか見てみたいし♪」

桐「ちよっと涙ねえ!やめてってば!」

涙ねえと桐乃は一緒浴室に入って行った。そしてリビングに残った俺と梓と希はというと、

勇「さてどうしようか?」

梓「どうしようかじゃないでしょ!! まだ皿の片付けがあると言  
うのに!」

勇「そ、それは面目ない、じゃ俺と梓は皿洗いするから希はテーブルの回りを掃除してくれ」

希「うん、わかった」

勇「梓もわかった?」

梓「はい お兄ちゃん」

こうして俺&梓と希で分かれた。

くキッチン」

梓「お兄ちゃん、ちょっと聴いていい？」

勇「ん？別に構わんが」

梓「そ、そう それじゃ……、」

俺は食べ終えた皿やお碗を洗い、それを梓がタオル布巾で拭くという感じで話しながら喋る

梓「お兄ちゃんは好きな人 いる？」

勇「ぶっーっ！！」

梓は一体何を聴きたいんだ！？発言するにもほどがある！！

勇「い、いきなり何を！？」

梓「だって……お兄ちゃん……その年になっても好意……を持ってないし……」

梓、俺は梓を含んだ家族みんなが好きなんだ。でも好意として好きなのは涙ねえと桐乃と梓と希って、そんなことはまだ言える訳がないんだ

勇「し、心配するな！い、いずれ好きな人ができたら教えるからさ」

梓「本当に？」

梓の目は疑問の目だった

勇「本当、本当」

梓「じゃ その時は桐乃お姉ちゃんと一緒に白状させてあげるから」

あははは……梓は外見が可愛くても、中身は悪魔だね

俺は顔を笑顔でひきった。

そして皿洗いが終わり、キッチンから離れた。

勇「ふう、終わった」

梓「それじゃ私は部屋に行くから」

勇「おう」

そう言っつて梓は階段を上がって2階の個室部屋に入っつて行つた。

勇「んで希はまだ続いてんだ？」

希「うん」

あれから数分も経つてまだやつてゐるつてことは俺と居たいからわざと遅くしたつもりなんだろうか？

勇「希 わざとやつてゐるだろ？」

希「わざとなんてしてない ちゃんと掃除してる」  
にしても希の掃除エプロンはよく似合つてゐるな

（服装は個人の想像にお任せします）

勇「まあ別に してるならいいけど、希 話すことはあるだろ？」

希「話すこと？」

勇「そう」

さっきまでの希はテーブルの片付けしていて、今は床のゴミをほうきで掃いてゐる。俺は希が掃いてゐるゴミを集め終えるまで待つていた。

希「別にない」

勇「がくっ！ ないのかよっ！」

そこは釣られて話すんじゃないの！？

勇「本当に話すことはないのか？」

希「ない」

なんか冷たいな

一瞬希が笑つたように見えたが俺は気づかなかつた。俺は一緒に掃除を終わらせ先き俺用の個室部屋に入つてベットに寝て明日を迎えることにした。涙ねえと桐乃は浴室から上がり希と話し、それから

各部屋別で寝ることにした。

今ごろ梓も寝てる時間だろ、

勇「はあく 今日疲れたなく」

今日一言を言って……………寝た。

……………

T  
O  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 姉妹の夕日・日和（後書き）

いかがだったでしょうか？

あやっちのキャラの口数が多いです　まあ好きなんだし

そして俺妹のキャラ　あやせ登場

出番は少ないけど桐乃の近くにいる友達、あ！表の友達で

なんだかあやっちのキャラを出したくなってきました。

あこ、美春、美緒・・・・・・・・あれ？現実にいるあやっちのキャラが出てこない・・・

というわけで、すみませんけど

この小説に似合いそうなあやっちのキャラを教えてください。梓と

希と桐乃は出ているのでそれ以外現実にいるキャラ（非現実キャラ・

エクレールなどはNG）お願いします

感想や意見お願いします

## 人生の夏休み（前書き）

どうも2次元です

いよいよ今回で夏休み編は終わりです

なんと早くも夏休みはおわりとは自分でも今は夏休みもいいですけど秋の行事がやりたくて早く負われせました  
まあまず読んでいってください

## 人生の夏休み

「俺の姉妹達の憂鬱 7話」

明日の朝を迎える前に軽い事件が起きた。それは俺がまだ寝ている時のこと、

勇「むにゃ〜むにゃ〜……………」

静かに睡眠してる俺、すると俺の部屋から誰かが入ってきた。こっそりと、俺のところに近づいて来た。ゆっくりとベットにさがりそして、

バシッ！！！！

勇「はっ！！、おま！」

？「しーっ！、静かにして！」

いきなりほほを叩かれ、俺の上にまたがって居るのはなんと、姉でも妹でもない、ほぼ同年である桐乃だった。

勇「なんでお前がここに！？」

今は真夜中だから普段のしゃべりを小さく聞こえるくらい話している

桐「ちょっと話があるから来て」

桐乃も小さく声で話してきた。

勇「話して明日じゃ駄目なのか？」

桐「明日が駄目だから頼んでんじゃん！？」

勇「……………」

どうゆうことだ！？     あの桐乃が俺に話があるとは、今まで頼ま



れごとは何回かあるがどれもろくなことはない、

桐「さっ早く来て!!」

勇「わーかったって」

というわけで桐乃が自分の部屋に行った後、俺も仕方なく桐乃の部屋へと行った。

桐乃の部屋はいたって女の子が飾りそうなものがいっぱいあって感心する。

桐「あんま　じろじろ見ないでくれる!」

勇「見てねえよ!　それで話してなんだ?」

桐「実は……」

勇「実は……」

桐「人生相談があるの!?!」

勇「人生相談!?!　お前!　深刻な問題でもあるのか!?!」

桐「ち……違うわよ!!　バカ!!　あんたに渡したいものがあるの」  
そういつて桐乃はキャリーケースから何かを取り出した。それは少し小さめで長四角形の箱を渡された。

桐「これ、あいつに渡しておいて」

勇「あいつって誰?」

桐「あいつのことなそこに紙がついてあるから、けど箱は開けちゃ駄目だから!」

勇「なんで!?!」

桐「紙に書いてあるキーワードでその時に開けて渡して、私の話はそれだけ」

勇「そんだけかよ」

桐「ぐずぐず言わない!、ちゃんと守りなさいよ!!　でないとあんたを殺す!!　いいな!」  
勇「はいっ!」

俺は桐乃から預かった箱を持って部屋に戻りに帰った。  
そして箱は机に置きすぐさまベットについた。

勇「ったく！ 可愛くねえ！」

最後の一言を言ってまた寝ることにした。

そして今日の朝、俺は普段に起きた。昨日桐乃から預かった箱を確認するため机をみた。

机の上に少し小さめの四角形、うん、夢じゃなかった  
はあゝ 夢だったらいいのに

俺が起きて下に降りると涙ねえ達が朝ご飯を作っていた。

朝食それとなく食べていた。

朝はどうしてるかというところ

朝はしっかりともう勉強

苦手勉強 英語・俺は日本人なのになぜペラペラ英語なのか  
国語は難しい、理解とか内容把握しろとかありえない！

その代わり得意分野は数学や実技体育

まあこの程度は楽勝

昼はまたもや家族みんなで海水浴

またもや涙ねえと桐乃と梓と希の水着がまぶしい

その後、桐乃にはひどく怒られたんだけど

その日の夕方&夜

早いうちに夕食を終え、2泊3日の最後の夜は花火をすることにした。

涙「ようし、花火するよ」

涙ねえが花火セットを持ってみんなを呼んだ。

一家集まり浜辺へと来た。

それぞれ花火を持ち、鉄皿についてあるロウソクの火につけ花火の光を灯した。

梓「綺麗だね」

希「綺麗」

勇「そうだね、花火って夜だと輝いてるね、………に  
しても夏休みも残りわずかしかないのか、時が進むの早いな」

涙「しょうがないじゃん、夏休みだもん」

桐「涙ねえの言う通り！我慢しろ！」

またもや桐乃に怒鳴られた。本当に可愛くねえ！

梓「お兄ちゃん、しょうがないよ ほら花火ってこんなに綺麗だよ」  
勇「梓……そうだな贅沢言えんな」

こうして2日目の夜は終わり、3日目の朝にはすぐ帰ることにした。  
俺にとっては長いようで短い夏休みだったことは忘れない、ましてや涙ねえが当選またはくじなんかゆるうとしなかったらこんな思  
い出に残る楽しさはなかったと思う

俺は当然のようにそう思っていた。

おまけ♪

帰宅途中の電車の中、座席で座っていた天川家、俺と涙ねえはあんなに疲れがあるというのに体や意識は元気、梓は涙ねえの肩で添い寝をして希は涙ねえの膝で添い寝している。まるで涙ねえが母さんみたいだな

と笑顔で見ていた。

すると突然、俺の肩に桐乃が添い寝って来た。よく見ていると添い

寝の桐乃は意外と可愛い

桐「んゝゝ勇一……ZZZ」

お！俺のことでいい夢でも見てるのか？

桐「キモ……ZZZ……ロリコン……ZZZ」

あははは……ひどく言われよう……だな……

俺達に乗ってる電車は次の駅まで走り続けた。

T O b e c o n t i n u e

## 人生の夏休み（後書き）

というわけで夏休み編は終わりで9月からは秋の行事を1ヶ月ずつ頑張っ て行こうと思います

では次回会いましょう

ラウラ&amp; m p; シャルさん、ユイにゃんさん感想ありがとうございます。

引き続き感想お願いします

## 新学期の騒動（前書き）

どうも2次元です いよいよ2学期／後期が始まりました。  
今回はドタバタから始まります

## 新学期の騒動

「俺の姉妹達の憂鬱 8話」

今月の9月は涼しく居られるはずだったのに今は……………

勇「暑い……………9月もこんなに暑いなんてまだ夏休み明けはしないのか……………」

俺は長いようで短い夏休みが終わっていると思ったがそれは間違えなのかもしれない、地球の環境がずれていて決まった季節が全然違っ……………

梓「お兄ちゃん、何難しい顔してるの？」

勇「え！！いや、別に」

梓いたんだ、多分俺を見つけたんだと思う

そして梓は突然

梓「お兄ちゃん、私 ここからは別の友達と登校するから先行くね。」

勇「ああ わかった」

梓はそのまま真っ直ぐに突っ走って行ってた

さて、おれも行きますか

15分後、ようやく俺達天川家を通う THE World X高<sup>クロス</sup>等学園ついた。

玄関で靴を上履きに履き替えて上がった。すると右側から誰かが走ってきた。ものすごい勢いで、よく見たら……………

？「勇……………一……………様……………」

勇「ん？誰だ？」

？「勇ー… ー…様ー…」

勇「…………げ！！ あいつは！！」

そう俺はよく知ってている人物、毎回毎回 俺の隣にいるパートナー的（あいつは勝ってに思っているが）

？「勇一様ー！ー！！！」

勇「お……乙姫！？」

乙「勇一さー！まあー！」

勇「ごぶうっ」

な……なぜか乙姫に殴られた！俺悪いことしてないのに！

乙姫に殴られて3メートルぐらい飛ばされて廊下に倒れた。ここにいる数人が今の騒ぎ見ている

（ちなみに乙姫が殴った場所は俺の顔の左頬）

勇一「いたたたたあゝ、何すんの！！」

乙「何すんの じゃありません！どうして私に連絡一つしてくれませんか！！、勇一様の誘いすー！ーと待っていましたの！」

あ！そういや夏休み中乙姫に連絡いれてなかったんだ！家族旅行とかカードゲーム地区予選大会とかいろいろだなく忙しかったんだ

勇「ごめん！ 乙姫 俺さ家族とか友達の手伝いとかあってお前を呼ぶのを忘れてたんだ ゆるしてくれ！」

乙姫のやつ絶対に怒ってるよ！

乙「勇一様がそこまでしてくれているなら……………勇一様、私は怒ったりしてませんよ」

勇「え！ 本当に！？」

乙姫が怒ってない！？！ということとは……………天使の女神！

乙「その代わり、勇一様の隣にずーっといますから」



なんだかんだ言って墮天使じゃないか……

そんなこんなで俺と乙姫の軽い事件から数分後、朝SHRが始まった。しかもこのクラスの担任が鉄人こと西村先生だった！

西「お前ら 急な話しで悪いが………」

鉄人が言うことはいつもハードだよ

西「今月末に球技体育祭を行う！！」

クラス一同「えーーーー！！！！！！」

球技体育祭ってあの地獄の祭りだよね！？

別名・デスマッチランド

朝から夕日が沈むまでのあの地獄の戦い！！

西「よって3、4週間練習を行う！！お前ら気合い入れておけ！！」

そして鉄人があの言葉を宣言してから数時間が経って放課後の帰り、

勇「はぁーいやだなー」

枯渴「確かに厳しいよなーなんせ男子達が主役だからなーきつと女子はあんまりやらないからな」

乙「お二人はいいコンビでしたわね」

勇「まあーな 息が合えば最高だし、」

枯渴「息が悪かったら最悪だし どっちもどっちだからな」

乙「ではわたくし、お二人を応援するために頑張って作ります」

枯渴「作るってなにを？」

乙「それは ひ・み・つ♪」

乙姫は嬉しそうに俺達を置いて帰って行った。

枯渴「なんだろうか？」

勇「さあー それじゃ俺達もさっさと帰って明日の授業の準備をするか」

枯渴「了解」じゃあな」

俺と枯渴は明日に備えてそれぞれ自分の家へと帰って行った。

T  
O  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 新学期の騒動（後書き）

これから忙しく書いていくつもりです

1ヶ月は球技体育祭を書きまくるので  
なにかアイデアをお願いします

次回も楽しみにしてください

前回のラウラ & amp; シャルさん、ユイにゃんさん 感想ありがとうございます  
とうございます。引き続き感想お願いします

## 2年Bクラス表設定（前書き）

こんにちは

球技体育祭に向けて今回Bクラスを詳細しました

あとキャラが分からない人のためにタイトルも付けました

ちょっとしたフル豪華です

## 2年Bクラス表設定

「俺の姉妹達の憂鬱」

2年Bクラス表

男子16人＋女子16人＝全32人

「バカとテストと召喚獣」

担任 西村宗一

男子

「俺の姉妹達の憂鬱」

天川 勇一

唐谷 枯渴

「バカとテストと召喚獣」

吉井 明久

木下 秀吉

土屋 康太

坂本 雄二

「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」

高坂 京介

赤城 浩平

「IS・インフィニット・ストラトス」

織斑 一夏

「とある魔術の禁書目録」

上条 当麻

土御門 元春

青髪 ピアス

一方通行

「まよちき」

坂町近次郎

「Angel Beats!」

音無結弦

日向 秀樹

男子16名

女子

「俺の姉妹達の憂鬱」

天川 希

「オオカミさんと七人の仲間たち」

竜宮乙姫

「バカとテストと召喚獣」

姫路 瑞希

島田 美波

霧島 翔子

「俺の妹がこんなに可愛いわけがない」

五更 瑠璃（黒猫）

田村 真奈実

「とある魔術の禁書目録」

吹寄 制理

上条 インデックス

「猫神やおよろず」

小宮 柚

「IS・インフィニット・ストラトス」

篠ノ之箒

ラウラ・ボーデヴィツヒ

「まよちき」

近衛 スバル

涼月 奏

「Angel Beats!」

立華 奏

ユイ

女子16人

## 2年Bクラス表設定（後書き）

このクラスで球技体育祭に出ます。

もし他のクラスも知りたい方がいればお答えします

前回の感想が出来なかった人は

ここに前回の感想書いてください

ラウラ&am p.; シャルさん、ラウラとシャルに感想してあげてありがとうございます

引き続き感想お願いします



## 球技体育祭編 始動！（前書き）

どうも 2次元です 球技体育祭が始まるとなればいろいろと設定を考えなければなりません

まあ気軽に読んでください

## 球技体育祭編 始動！

「俺の姉妹達の憂鬱 9話」

「選手 入場！」

学校のグラウンドの外 入場門から1年A組くD組、2年A組くD組、3年A組くD組と4列ずつ入って来た。

そしてその列は横に並び、左から

1年A組男子1番く8番

9番く16番

A組女子1番く8番

9番く15番

と感じに並んでいた。

この日の気温は暑すぎず、寒すぎず、まさに普通なみ

「校長 宣言」

え？ 校長宣言？ 選手が言うのではなくて校長？ おいおい冗談だろ！？ ハゲツルの爺長が宣言なんて下らねえく

なくんて思ったりすると台から現れたのは……………

ピンクの髪にあほ毛がうずまきでなぜかさらしをしていて背負い物をして衣を肩腰に着て下駄をはいてるなんとも昭和くさいかつこ、

しかも小さい……………小3くらいになるが、小さい……………

？「お前達、今 小さいとっているがこれでも大人なの」

その子はふところからビールをだし、ぱかっと開けグビグビとビールを飲んでいる

西村「シャモ校長 今はビール飲んででは行けません」

シャモ「これは 失敬なの、では第10回 THE World X 高

等学園 球技体育祭をはじめるなの」

シヤモ校長が宣言して球技体育祭の開始宣言をした。

えくと 8時50分 第1種目が9時10分に始まるから準備しないと、午前中は男女分かれて競技をする、そして昼からは男女で競技する

1種目 50メートル走

勇「よし、他の組に負けないように頑張らないと!!」  
俺はそう決意した。

各組テント

グラウンドのトラックを囲むテントのところで競技を待つ

勇一「……………」  
じーっとトラックや他のテントを見ていた。すると横から枯渴が来た。

枯渴「何ぼーっとしてんだよ!？」

勇一「え! いや ただじーっと」

枯渴「ふーん、けど休んではいられないぜ」

勇一「どうゆうこと?」

枯渴「他の組に最高速がいるらしい、」

勇一「へえー 一度戦ってみたいもんだな」

枯渴「じゃ気合い入れる必要ないな」

勇一「まさか入れてくれようと!？」

枯渴「お前のことだから弱気になってんじゃないのかと」

勇一「ありがとよ でも大丈夫 俺は弱気にならないぜ!」

枯渴「なら いいけど(これより第1種目 1年〜3年男子、1年〜3年女子50M走を行います 種目に参加する生徒は入場門で待

機して下さい) お!! そろそろだな」

勇一「じゃ行きますか!」

俺と枯渴は放送を聞いてすぐさま動いた。もちろん周りにいた同じ組、別の組も動いた。

さうて やりますか!! 今年こそ優勝だー!!

T O b e c o n t i n u e

## 球技体育祭編 始動！（後書き）

次回から種目編 難しいけど頑張ります

ラウラ& a m p、シャルさん、シオンさん  
感想ありがとうございます 引き続き感想お願いします

## **第1種目 50M走(前書き)**

どうも 2次元です

今回から種目ごとに投稿していく予定です

## 第1種目 50M走

「俺の姉妹達の憂鬱 10話」

？「さあ、今年もやって参りました THE XWorld 高等学園 球技体育祭！ また激しい戦いになるでしょうか！ 実況はこの俺菊池家康がお送りします、そして俺と一緒に解説をして下さる今日のゲストさんです どうぞ！」

？「こんにちは みなさん 巴 マミです 今日は悔いがないよう頑張ってください」

家康「とのこと！ 会場みなさん 期待しますよ！」  
おいおい、俺達はそんなには出来ないんだぞ！

にしてもゲストってうちの生徒じゃん！？ 何がしたいんだが、  
そういえば巴 マミは3年で成績は1、2位の優等生、よく相談とか乗ってくれているとか、ホントいい人 まあうわさで聞いたんだがなどと思ったりしているとやっと1年の50M走が始まった。

家康「さあ、始まりました1年の部 男子の走りは風邪を斬る生徒やホップ・ステップで走る生徒などいろんな人が走ってましたね 巴 マミさんはどう思います？」

マミ「そうね こんなに個人の芸術ぶりの走り方は初め！ て もう何も迷わない！ わたしずっとここに見ていたいから！！」

家康「そ…そうですか…」

そのあと解説は続いていた。10分後、1年の部が終わり、いよいよ2年の部が始まる入場門から出てきた2年A、D組 校舎の中央トラックの中で整列した

左からA、B、C、Dと1番手が並んだ

家康「続いて2年の部に参ります 2年男子1番手  
AコースA組 鮫田吉川

BコースB組 吉井明久

CコースC組 久保利光

DコースD組 仔野田 雅俊の配列になります」

明久「あ！久保君！」

久保「あ！吉井君！」

明久「まさか最初の一番手が一緒だなんて奇遇だね」

久保「ホント 僕も嬉しいよ、（吉井君と一緒に走れるなんてこれは天の神からの願いなのか！？）」

明久「ん？どうしたの久保君？」

久保「！！！！ な、なんでもないよ！！！」

明久と久保君？何話してんだろう？というか今競技中なのになにやっつてんだよ！！

工藤「はーい、おしゃべりはそこまで じゃ行くよ」

体育実行委員の工藤さん、相変わらず体育委員に似合ってるね

明久「久保君 この勝負恨みっこなしだよ！」

久保「構わないよ、吉井君と勝負が出来て 本気でいかせてもらおうよ！！！」

明久「負けるもんか！！！」

工藤「スタート！！！！」 発声と同時にピストルを空に向けて撃ち、開始の合図をした

家康「第1走者4人が走りました！トップは吉井明久、2位は久保利光、3位鮫田吉川、4位仔野田雅俊」

マミ「さすがは 男の子ね、結構足速いんですね」

久保「（吉井君の後ろからみた姿は愛くるしい背中）」

明久「（な…なにやら悪寒が）」

よし、明久と久保君の距離は近いけどそのまま逃げ切れば1位は取



れる！

土屋「……ゴール」

ムツツリーニも一応体育委員の仕事をしてるんだね

家康「4人がついにゴールしました、順位は

1位久保利光

2位吉井明久

3位仔野田雅俊

4位鮫田吉川

という順位でした。なお、50M走の順位ポイントは

1位50点

2位40点

3位20点

4位10点

で行います」

マミ「男子生徒のみなさん、頑張ってください」

男子「おおー！ー！ー！」

やはりこの学園にマミさんのファンがいるようだ

家康「それでは第2走者以降参りましょう」

このあとも走者は続き、

第2走者、雄二の時

雄二「へっ！ お前らなんかへでもないぜ」

するとB組テントから

霧島「雄二！！ 1位になったら結婚して！！」

雄二「しょー！……翔子！？」

須川「坂本！？貴様というやつは！！！！成敗してやる！！」

雄二「ひいいい！！これは勘弁だ！！」

A組の須川の憎しみで雄二が圧勝で1位取っちゃって逃げている感じだった

3走者 A組野田は木刀持っていやがる、そうかハルバートは機密で没収されたんか

野田「おい！そこのづら！」

京介「ん？俺か？俺はづらじゃないぞ！」

野田「貴様が女の子の周りにいるなんてきにくわねえ、男ならガツンと行け！」

京介「はぁ？意味わかんねえ」

工藤「スタート！」

野田「この、ハーレム男が！！」

京介「ギャーッ！！」

あれ？京介は野田に追いかけて野田は京介を木刀で殴ろうとしている！

野田はせめて武器がないと落ち着かないから木刀で許可をだしたらしい

土屋「……ゴール」

あの二人ゴールしてもまだ続いている

そして5番手

直井「音無さん！？」

藤巻「音無！！」

音無「直井！に藤巻！かゝなんか奇遇すぎて恐ろしいな」

A組の直井、D組の藤巻

直井「僕は音無さんと走れて嬉しいですが、そっちのざことは違って」  
藤巻「おい！？直井！それはどういうことだ！」

直井「ざこを呼んで何が悪い！」

音無「お前から今ケンカするな！？」

その後も走るが

1位C組 水原

2位A組直井

2位B組音無

4位D組藤巻

という結果に、それにしても直井はもっと走れるきがしたんだがなぜ音無に合わせた？

## 第6走者

当麻「さあゝて走りますか！」

？「おい！上条当麻 あんまり浮かれるなよ！」

当麻「あ！ステイル！ にしても背高ーな」

ステイル「改めていうことじゃないだろうが！」

D組 ステイル 身長が195cm弱あるし大人に見えるがこれでも学生

ステイル「彼女はどうか？」

当麻「彼女？あゝ！インデックスのことかゝ」

ステイル「あんまり口にしていうなよ！！」

当麻「あゝ ごめん ごめん、（インデックスなら普通にしてるけど）」小声

ステイル「そ、そうか……けど勘違いするな！ 別に彼女のことは何とも思っていないからな！！」

当麻「はいはい……」

工藤「スタート！」

そして駆け走る2人とその2人を追いかける2人

当麻「にしても……ステイル！お前 前が邪魔だ！」

ステイル「文句を言うな！！上条当麻！」

結局順位が

D組 ステイル

B組 当麻

A組 篠原

C組 牧田

になった

第8走者

A組 閻湊原

B組 天川

C組 杉崎

D組 野々村

勇一「よっ！鍵」

鍵「あ！あの時の代役の人！」

勇一「あれから決まった？」

鍵「決まったというか正しい人、かなでさんが決めたんだけどね」

勇一「どんなの？」

鍵「この後に言うよ」

俺と鍵は位置に着いた。工藤さんの合図で俺を含めた4人が走る、  
ほとんど大差出ず

1位A組 閻湊原

2位C組 杉崎

3位D組 野々村

4位B組 天川

勇一「鍵、聴かせてかなでが決めたあれ？」

鍵「お前に言って何になるのか？もう生徒会じゃないんだし」

勇一「一応聴いとかないと心のもやもやが消えないんだ！」

鍵「わーったよ……えっと……確か……」

く4・9話（生徒会の一存にて）く

俺が生徒会室を後にしたその日

鍵「かなで会長、決まりました？」

かなで「そうね、題名は

暑さを乗り越えれば涼しさがやってくる

みないな」

く4・9話（生徒会の一存にて）く

鍵「って会長が決めた」

勇一「そ…そうか、」

変わった題名だなく

その後も何人か続きいい成果が出た人もいた。

俺らB組男子は

1位50点を取った人

雄二

京介

一方通行

日向

土屋

2位40点は

明久

上条

赤城  
秀吉  
枯渴

3位 20点は

近次郎

音無

土御門

青髪

一夏

4位 10点

俺 勇一さっ

トータル 560点追加

次は3年の部

3年は最後の球技体育祭だから悔いがないよう一生懸命に走っていた。

家康「いやゝ魅力的ですね、3年生は最後の力を振り絞って頑張っていますね」

マミ「ホント、いいもんじゃないわよ、球技体育祭って 結構ハードで体力を使うから大変なのよ。次の休みの日は朝から突然筋肉痛でなかなか動けないんだから」

家康「確かにそうです、みなさんは気をつけて下さい」

全く そして第1種目が終わり、現地点の点数は

A組 1420点

B組 1350点

C組 1310点

D組 1290点

という結果になり

次の第2種目に持ち越した。

T  
O  
b  
e  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 第1種目 50M走（後書き）

話が長くなってしまいました。  
結構大変です。でも頑張って書きます



## 第2種目・大いなる騎馬戦（前書き）

どうも2次元です

今回は2つに分けて書きました。

予想以上にまとまらなかったんで  
どうぞ読んでください

## 第2種目・大いなる騎馬戦

「俺の姉妹達の憂鬱 11話」

家康「さうして第1種目目が終わり、第2種目目の戦いが今始まるう  
としています 第1種目のゲストは巴 マミさんでした。続いての  
ゲストはこちら2人です」

？「こんにちは、私鹿目まどか です」

？「こんにちは、私 暁美ほむら です」

家康「今度の2人はなかなか可愛いらしい人がやってきました！」  
まどか「なんだか……緊張……するな……／＼」  
ほむら「大丈夫！ まどかには私がついているから」

（B組2年のテント付近）

勇一「へえ、ゲスト また変わったんだ」

？「おーい！ 勇一、」

勇一「ん？……あ！一夏！」

あいつは織斑一夏、

一夏「何ぼけーっとしてんだ？」

勇一「え！？」

一夏「ほら、2種目目が始まるから行くぞ！俺らチームだろ！」

勇一「そうだったな」

俺は一夏に呼び出されて一夏と一緒にまた入場門前に行った。

俺と一夏は整列に間に合い騎馬戦のチームごとに並んだ。俺のチ  
ームには枯渴と近次郎がいた。

近次郎「遅かったな」

枯渴「何やってたんだ？」

勇一「ちよっと……な」

今グラウンドには1年の騎馬戦が始まっていた。それは途方もない戦いだった。1年の割には恐ろしい戦いで、マジにしか見えない騎馬戦、まず戦う相手を探す、見つけたらバトルするが、ここからが重要なんだ！

馬に乗ってる人間は相手の人間を地面に落とすか馬を完全に崩すまで乱闘し続ける！馬はそのサポートとして突進をする

そう、我が学校は他の学校の騎馬戦とは一味違うのだ！毎年毎年負傷者が2、3人この騎馬戦に出してしまう命がけの戦い！

そしてこの戦いは代表トーナメント式、各学年ごとに代表トーナメントして勝ち抜いたチームが学年の代表となり、それぞれの学年と総当たりで戦い、優勝を行う

それが THE Xworld 高等学園のやり方

家康「おーっと！！」

スピーカーから驚きの反応をした家康の声がした。2年男子はグラウンドを見た、その光景は

あるAチームは3組のチームに囲まれている

家康「ななななんと！！AチームはB、C、Dチームに囲まれてリンチされてます！」

まどか「そんな！卑怯だよ！！こんなあんまりだよ！！」

ほむら「まどかの言うとおり、誰もあのAチームを信じてない、可哀想」

男子A「やばいだろ！あれ！」

男子B「でも あいうのは反則にはならないらしいぜ！」

男子A「確かに、この学園には

「全力で突っ走れ！そこには希望がある！！」

って格言があるし」

男子C「この学園は格言通りにしてやりすぎだと思う」

などと、小耳で聞いていた俺 ちよっとこの学園はいろんな意味で

危なすぎる

そんなことを思っていると1年の騎馬戦に変化が!?

家康「なんと!?! 囲まれていたAチームは、囲んでいたB、C、Dを蹴散らし、指揮官していたチームを返り討ちにして勝利を手にした!?!」

まどか「すごいよ! ほむらちゃん!」

ほむら「これは期待が出来るわ」

家康の解説やゲストの2人のコメントもそうだが確かに最悪の状況を見事形勢逆転し、1年代表として代表 総当たり戦に出場した。  
というこは

枯渴「この戦い、本気でやらないと」

一夏「まじで殺される」

近次郎「全く、ありがた迷惑だけどうがないしな」  
考えてることはみな同じってことか

勇一「ならば、やってやろうじゃないか!?!」

一年の騎馬戦が終わり、全員が退場門へ出て行った。

家康「さうてお次は、2年の騎馬戦です」2年AとDは入場門から入ってグラウンドに行き、四方に分かれ組まれた相手の正面に立った

A

B      グラウンド      C

D

1回戦第1試合

A v s D

その試合はまるで獲物を狩るような戦い、最初はD組が押していたけど、その5分後にAの勢いがあがり、圧倒的にD組を全滅した。  
よってA組が2チーム残して勝った。

## 第1回戦第2試合

B v S C

この戦いは苦戦するがなんとか勝利をした。

とあるチームが乱闘している間、俺らのチームは2対1で攻めて相手の戦力をじわじわと減らして確実に相手を倒してやった。

よってB組は3チーム残して勝った。

いよいよあのA組との決勝バトル

その前に3位決定戦

C v S D

もういたって普通のケンカみたいな感じだったな

よって3位はD組

ポイント的に40点

4位のC組は20点

そしていよいよA組との決戦！

A組に対して前のやり方は通用しない、強豪揃いだ

家康「さあ残すところ決勝戦だけです！果たしてどちらのチームが勝つんでしょうか！？」

それぞれ騎馬の用意をする、あとは開始の合図　それまでは互いに睨み合い！

家康「それでは、決勝戦スタート！！」

A組「おぉー！！」

B組「おぉー！！」

俺達の戦いが幕を開ける！

T  
O  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 第2種目・大いなる騎馬戦（後書き）

我ながら遅れているけど まどかマジカにはまっています、  
この作品に追加するってことはそのキャラが好きでだすことになり  
ます

朝方この作品を考えていたら天川家にもう一人追加しようと思います  
詳細はこの作品で教えます

感想・意見があれば書いてください。まだまだ球技体育祭編は終わ  
りませんよっ

## 第2種目・騎馬戦・後編（前書き）

どうも 2次元です

最近 なんか書く力がないというかだるい日が続いてまして  
投稿が遅れました

話は前回の続き 後編です  
ではどうぞ！



## 第2種目・騎馬戦・後編

「俺の姉妹達の憂鬱 12話」

一方通行「お前ら！！！！死ぬきで突っ込めー！！！」

明久「行くぞ！雄二！秀吉！ムツツリーニ！」

雄二「正面は任せろ！」

秀吉「サイドからはわしが！」

土屋「速さなら任せろ！」

バカテスチーム意気投合してる！？

なんてやつらだ！？

音無「勇一！」

勇一「！！！」

音無「お前は俺達の反対側に回れ！」

勇一「というわけだ、ゆけー！！！」

枯渴「任せとけ」

音無に言われて反対側に行く、するとバカテスチームとバトルしているのが目に映った。しかも相手はこちらに気づいてない。これはチャンス

勇一「枯渴、一夏、近次郎 敵は2時の方角だ、行くぞ！」

俺らのチームは敵の騎馬の背後を狙って前進した。近づいて枯渴の突進攻撃！！

A組チーム2「うわっ！」

男子「くそっ！背後から！」

明久「よそ見は禁物だ！」

男子主頭「ぐはぁっ！」

明久の右フックが決まり主頭は倒れ、陣形が崩れた。

勇一「やったな、明久」

明久「ああ」

A3 v s B4

勇一「この調子で行くぞ！」

A組チーム3主頭「もらったー！」

一夏「しまった！」

近次郎「間に合わない!？」

いつの間にか俺らの背後に回っていた！

このままでは陣形が崩れる!？

音無「やらせるか！」

日向「いっけー！音無！」

京介「お前らの邪魔はさせねーぞ!!」

赤城「そこ!どいた!どいた！」

俺らの背後を狙ったチーム3を音無達が妨害して俺らを助けた。その後、2組は陣形が崩れ失格になった。

A2 v s B3

勇一「すまない、音無達の分まで戦ってやるよ、さあ行けー！」

枯渇と一夏と近次郎の足で俺を支えながら前進する、相手は2チーム こっちは3チーム、2、1で行けば勝てる！

一方通行「貴様が親玉かア」

? 「おやおや 誰かと思えば一方通行いやアクセラレータじゃないですか」

一方通行「別に言い直さなくてもいいだろうがア 沖田」

ん? アクセラレータが戦いを挑んでるやつは 沖田 宗悟 あいつ超がつくほどのドSやろう

沖田「アクセラさん、いっちゃやっちゃまいましょうか!？」

一方通行「上等だ! ひねりつぶしてやる!」

あーあーもうあーなっては手がつけようにないな

勇一「枯渴、一夏、近次郎 他の敵に行くぞ」

枯渴「え! あいつはいいのかよ!」

勇一「あいつは好きに暴れさせとけばいいんだよ! 俺らは明久達の方に向かうんだ!」

一夏「わかった」

近次郎「あいよ」

俺達とはあるチームを無視してバカテスチームの方へ行った

勇一「明久達!」

明久「勇一 大丈夫だった?」

勇一「ああ! なんとかな、さっさと敵を倒すぞ!」

明久「OK」

俺達とバカテスチームは敵のもうひとつ1チームの方に2チームで倒しに行った

勇一「おおー!」

敵チーム「来たな!」

明久「こっちもいるよ!」

敵チーム「な! 何!」

俺達とバカテスチームは2対1で挟み撃ちで攻め、殴り合いをする  
そして見事に敵チームを倒し、とあるチームが戦ってる相手へと向かった

明久「いっけー!」

明久達の騎馬は最後の敵チームに攻撃を仕掛ける

土屋「!？」

雄二「どうしたムッツリーニ？」

土屋「!!」ブシャー

秀吉「ムッツリーニ!今倒れたら陣形が!」

明久「え!え!ちょっとムッツ……」

バカテスチームはムッツリーニが倒れ人馬が崩れた

家康「おっと!ここでまさかのバカテスチームがいきなり崩れた!

土屋康太選手なぜ倒れた!?!しかも血が大量に!!」

これによりバカテスチームは失格、ムッツリーニは保健室送りになった……

A1vSB2

一夏「土屋君大丈夫かな」

勇一「大丈夫 大丈夫ムッツリーニは強いからすぐ復活するだろ」

近次郎（俺と似た者同士……）

勇一「気を取り直して行くぞ!!」

俺達とはあるチームと一緒に敵チームを倒しに行く!

沖田「アクセラさん、あんたの力はそんなもんなんですか」

一方通行「うっせエ!お前こそ俺にたてつこうなんて100万年はえーぜ!」

アクセラレータと沖田の中は最悪中の最悪!

アクセラレータと沖田は手と手で掴みあっている

当麻「おい!アクセラレータ!早いと……けりをつけて……くれ」

土御門「そう……だぜえ……このまま……だ」と

青髪「相手の……思うがままや」

一方通行「お前らあ!俺に指図すんじゃねエ!!」

アクセラレータと沖田が戦っている時、俺らは止まって見ていた。

枯渴「どんすんの？」

勇一「ここは2チームが落ちるのを待とう」

枯渴「正気か！お前は！」

だが俺の選択肢は間違っではなかった。時間かけて5分後

2チームとも力が尽きて失格となり　ほぼぼーぜんと立っててそのままB組が代表戦に進出

あの二人の暑苦しさにみなもバテバテ

家康「とーいう訳で最後は犬猿の中で互いに失格となり残ったB組の1チームが勝利しました！これで2年代表として代表戦に選ばれました！」

この後の代表戦は思いもよらぬ展開だった。

組み合わせくじで決まり、組み合わせの結果は1年C組と2年B組が対決

さっそく1年と対決するが

1年C3vsB0で1年が勝った

予想以上に強くて俺達より早く連携プレーしてやられた

そして1年vs3年の対決

最初は1年の速攻連携プレーをかます、だが1年の連携プレーは3年の1・3プレーでやられた

1チームが囷になって（いわゆる餌になって）それにかかった獲物を3チームで潰しまくる、相手の連携を利用して全滅させた。

家康「さてポイントは怎么样了かというところ……」

組対決　総合ポイントA組　580点

B組　550点

C組　590点

D組 530点

そして代表戦ポイントは

1年C組 750点

2年B組 600点

3年D組 900点

を加算

よって

A組 2000

B組 2500

C組 2650

D組 2720

A組は代表戦に出ることが出来なかったため特別ポイント500点を加算

よってA組は2500点

1位D組 2720点

2位C組 2650点

3位A組 2500点

3位B組 2500点

という結果になりました。男子生徒の皆さんお疲れさまでした！

午前中の種目大変だったでしょうがここから休憩が入り、

次は女子生徒の番です

女子生徒の皆さん、午前中の後半戦頑張ってください」

ようやく男子生徒の活躍が終わった

次は第3種目・借り物競争となる

T  
O  
  
b  
e  
  
c  
o  
n  
t  
i  
n  
u  
e

## 第2種目・騎馬戦・後編（後書き）

いろいろと省略しすぎてすいません

すでにずっと先の話を作ってましてそれを書きたいのに書けないのが辛い

でも頑張って書きます

次回の投稿は気分と気力次第で出します

なにか誉めことばがあれば勇気がわかるかもしれませんよ



### 第3種目・女子達の借り物競争（前書き）

どうも・・・2次元です

今回投稿が遅れて・・・話がぐだぐだかもしれませんので

それでも構わないなら読んでください

### 第3種目・女子達の借り物競争

「俺の姉妹達の憂鬱 13話」

家康「さうて短い休憩が終わり、第3種目 借り物競争が始まろうとしています」

2年B組テント

勇一「今からだ俺達の出番なさそうだね」

枯渴「だな、見るしかないようだし」

ここからは勇一の代わりに作者が愛する人に変わってもらいます

希「にゃーりょーかい♪」

次の競技 借り物競争

私達2年がやる前1年が先に見本のようなやり方を見せてくれたとてもすごかった、内容的借り物競争じゃないことはわかったけどなんだか楽しそう

姫路「希ちゃん、」

希「瑞希、どうしたの？」

姫路「もうすぐ始まりますよ♪早く並ばないと」

希「にゃーわかった」

私はグラウンドを見ていたけど瑞希に見つかり、瑞希と一緒に列へと戻りに行った。

そして列に戻り、私の隣にはなにやら見覚えのある人が並んでいた。競技が開始してから10分が経つ、やっと1年の借り物競争が終わ

った。いろんな人が物や人、貴重品など持っていた。

これは事前にアンケートで書いた中から使われたいたみたい  
ということとは私が書いたあの紙が入ってるかも……………

そして2年女子が列のまま動き、トラックの南側へと並んだ。反対  
側は土台の上に箱があり中には指名の紙がある、それが4つ つま  
り私が書いた紙は4分の1  
初めは乙姫が1番手にゃ

乙姫「こうなればなんとしても勇一様との密着指名をゲットしない  
と！」

勇一「ブルブルブル!!」

枯渴「ん? どうした？」

勇一「なにやら……悪寒が……」

鈴「足なら負けないし一夏は私の物だから」

2年A組 凰鈴音

律「さくで部長の力を見せるとしますか！」

C組 田井中律

? 「さて、何を借りるのか楽しみだ」

D組 美樹さやか

土屋「……………それでは位置について……………よい、」

保険体育係りの土屋康太

さっきまで保健室に運ばれたはずなのにもう帰ってきてる

私はB組含めA、C、Dを心から応援している

ドンッ!!

スタート合図はピストルを上空に向けて音を響かせた

その同時に4人の生徒は4つの箱を目指して走っている  
来た順番に好きな箱の中から指名紙を取って40秒以内　ゴール出  
来れば

100点

1分以内　ゴール出来れば50点  
それ以降は10点にゃ

最初に手をつけたのは凰鈴音  
手にした指名紙は

鈴「なによ！これ！」「一夏の男友達」一夏の男友達って……………あい  
っしかない」

凰鈴音はそのまま箱を通り過ぎどこかへ行った

次に来た人　田井中律

律「前の人は早いな、さてお題は「部の一部」軽音部でもいいの  
かな」

田井中律は急いで校舎へ走って行った

次は美樹さやか

さやか「さてお目当ての物は「杏子の食物」……………なんで食べ物、  
しかもよりによって杏子のかよ！」

美樹さやかはまだ列にいる佐倉杏子という人に急いで話しかけた。

さやか「杏子！」

杏子「ん？さやかどうした？」

さやか「あんだ、食べ物持っていない？」

杏子「食べ物？ そうだなーC組教室の黒板に向けて前から4番目、左から2番目の席にあると思うから」

さやか「わかった　ありがとう杏子」

杏子「まあ　頑張れー」

美樹さやかは佐倉杏子と話しをした後、校舎へ向かった

最後は竜宮乙姫

乙姫「みなさん、早いん、ですね、はあーはあー、では勇一様との願いは！「勇一の姉」誰です！？　こんなのを書いた人は！？　って怒っても仕方ありませんよねー、勇一様のお姉さんって確か、涙子さんって勇一様が言っていましたよね」  
4人がそれぞれの物を取り行った

乙姫「涙子さん、涙子さんはいませんか？」

竜宮乙姫はグラウンド中に聞こえるぐらいの声でした。

涙子………涙姉ちゃんを呼んでる

初春「サテンさん、」

涙子「ん？　どうしたの　初春」

初春「誰かが呼んでますよ」

涙子「ホントだ、ちよつと行ってくる」

テントから涙姉ちゃんが現れた。

涙子「はい、私が涙子ですが」

乙姫「良かった、借り物競争の物が見つかった」

涙子（私が借り物競争の物）

乙姫「少し時間いいですか？」

涙子「ええーいいですけど」

乙姫「じゃ借り物競争なので私と一緒にゴールしてください」

涙子「はぁー、」

こうして1番は36秒で竜宮乙姫、借り物は涙姉ちゃん  
そして後から45秒 鳳鈴音が……勇一を連れてゴール にゃ〜嬉  
しそう

鈴「まったく！なにぐだぐだしてんのよ！」

勇一「はぁーはぁー、お前が早く……はぁー……借り物競争って……  
……言っとけば焦らずにはぁー…………済んだ……のに」

その後、52秒で美樹さやかが来たにゃ〜

さやか「たくっ、行きも、帰りも……遠いよ」

借り物はポッキーの箱 中身もある

最後は58秒の田井中律

律「まあ結構かかってしまったけど部の物ならドラムスティック！  
でもいいんだよな〜」

家康「結果はB組100点 A、C、Dは50点を加算です、さあ  
第2走者はこちらです

A組 シャルロット・デュノア

B組 天川希

C組 佐倉杏子

D組 芹沢文乃

土屋「……位置について……よいい」

パンツ！

私は音がなった瞬間、スタートダッシュして3人を引き離れた

わずか6秒で借り物箱に到着、箱に手して紙を取った  
内容は「勇一様」にゃあ？

なんで勇一？私は一瞬不思議に思ったけど、今は借り物競争に集中する、そして指定してある物を探しに行った

すると他の組テント裏に勇一の帰る姿があった

勇一「はぁ、俺は借り物じゃないんだぞ」

希「勇一、勇一」

勇一「ん？、希……どうした？」

希「借り物競争だから」

勇一「ま……さ……か……」

希「だから早く行こう」

勇一「の……希、そんなに手を引っ張るな！てか早すぎ!!」

私は勇一の手をつかみ、来た道を引き返した

そしてトラックに戻り、ゴールテープがあった

まだ誰もゴールしてない にゃーチャンス

私はそこから勢いよく走りゴールテープにさしかかって完走した

結果 1位、35秒 借り物「勇一」

勇一「はぁ、はぁ、またもや借り物扱いに」

希「大丈夫？」

勇一「あ……ああ大丈夫さっ」

後の人達もみんな帰ってきた

2位 文乃 40秒 借り物「野球バット」

文乃「この野球バット、試しかいがありそうね」

勇一「いやーそれは野球道具の一式だから」

3位 佐倉杏子 58秒 借り物「友人の私服」

杏子「いやゝギリギリセーフ、さやかが持っていたなんて思わなかったよ、結構いいじゃんこのジャケット」

4位 シャルロット・デュノア

1分2秒 借り物「ほうき」

シャルロット「うゝ少し遅れてしまった、もうちょっと足が速かったらゝ」

家康「これで第2走者が終了、さあゝこの後一体どんな借り物競争になるんでしょうか!？」

この後、B組の女子は借り物競争を大いに楽しんでいた

そして15分後、2年女子の借り物競争が終わった

家康「いやゝ女子達の借り物競争 素晴らしいですねゝ、勇一君はなぜ7回も借り物になったでしょうか!？……………」  
では総合ポイント

A組840点

B組680点

C組720点

D組550点

よってトータルポイントは

A組3340点

B組3180点

C組3370点

D組3270点

よってまたもや順位が変更!



1位C組3370点  
2位A組3340点  
3位D組3270点  
4位B組3180点  
となりました。

C組とA組の順位は変わらず上位に上がり  
C組がトップとなりました。D組は1位から外れ3位に落ちてしま  
った

それに比べB組は、最下位に けど点数が近いうえまだ逆転は可能  
次が午前中ラストの競技、午前中の競技でどれだけ点数を足せるか  
見ものです」

いよいよ次が午前中最後の競技  
私はくじけず最後まで頑張る！  
そう心で決心をする私、

T O b e c o n t i n u e

### 第3種目・女子達の借り物競争（後書き）

今回は希視点で書いたんですけど

うまくできたか・・・

またいつ更新できるか気力しだいになります

あと意見や感想をください

#### 第4種目・コスプレ大会!?!前編(前書き)

ずいぶん遅くなっていました

結構 小説作りも楽ではないですね

読む方は暖かい目で読んで下さい

## 第4種目・コスプレ大会!?! 前編

「俺の姉妹達の憂鬱 14話」

家康「さあ!!! いよいよ午前中最後の競技となります! それは  
……突然紙が送られて来ました、

なんと!?! 最後の競技を変更してコスプレ競技となりました!?!」  
女子全員「えー!?!?!」

女子A「なんでコスプレなのよ!」

女子B「頭 おかしいじゃないの!?!! それとも腐ってんじゃないの!?!!」

女子C「てか意味わかんない!」

にゃゝ女の子の不満な言葉がいっぱいしゃべってる

家康「いやー、俺に言われてもとあるS・Kの手紙が来て絶対命令  
されてるから」

ゝ2年B組テントゝ

枯渴「なあ勇一、」

勇一「なんだ? 枯渴」

枯渴「S・Kって誰だろうか?」

勇一「さあ俺には知らない」

枯渴「S・Kだから今流行りのSKE48の一人とか?」

勇一「言っちゃ悪いがあれは2次元の世界だ」

枯渴「じゃ、サンタクロースの略とか?」

勇一「子供の夢をもつサンタがただの変態だった、なわけがなから  
うが」

枯渴「じゃ 誰だよ？」

勇一「きつとすぐ出るだろう」

？「そのS・Kはこの私！」

突然台から現れたのはちよつとメイドのような服装をして、髪はちよつとツインテで白いリボンで止めていて  
赤い瞳の女の子、私のクラスメイト

涼月 奏

涼月「さあ、今からコスプレ大会を開催するわ！」

男子「おおー！！！」

男の子のは涼月奏の言葉で大いに盛り上がってる

涼月「ではコスプレ大会の説明をします、それぞれの学年の各組ごとの代表が出ます、

それで、ある人を鼻血で出血させた組には勝利ポイント1年は500点、2年は1000点、3年は1500点を差上げます！」

男子「おおー！！！」

枯渴「ん？どうした？勇一 そんなに震えて」

勇一「ガクガク……………ガクガク……………」

涼月「それでは審査をする人呼びましょう 天川勇一君……天川

勇一……」

枯渴「勇一、なんか涼月奏が呼んでるぞ」

勇一「俺は……………知らない」

涼月「天川勇一君……もし自ら出て来ないならこっちから探しに行くわよ」

そのころ天川家の人達は

3年・C組……涙子「勇一、何してんの？涼月さんが呼んでるのに」

2年・D組　桐乃「あのバカ！さっさと出なさいってば！」

五更「あらゝあなたが勇一君のこと気にかけるなんて意外だわ」

桐乃「はぁ！あたしがあいつに気にかけるわけがないでしょうが！」

沙織「キリリン氏、外心はそうおっしゃってるでござるが内心は本当のことを……」

桐乃「うっさい！！」

1年・A組　梓「お兄ちゃん、何やってるだろう？」

2年・B組　希「勇一………」

2年・B組　勇一「俺は知らない、俺は知らない」

涼月「現れないなら、こっちから探しに行くわ」

涼月奏は左手にマイクを持って、右手で指を鳴らした

パチン！

すると勇一の後ろに2人の女子が………

勇一の腕を組んで持ち上げた

勇一「！？」

スバル「では参りましょうか」

音姫「さぁ勇一様、行きましょうか」

勇一「え！え！ってスバル！音姫！どういうことだよ！！」

スバル「これは奏お嬢様からの指名ですから」

音姫「勇一様には罰というものがありますから」

勇一「いやだー！！！」

勇一は両方に腕を組まれて涼月奏まで連れて行った

涼月奏の前では勇一腕は近衛スバルと竜宮音姫の2人に捕まれて座らせてる、それはまるで江戸時代の拷問みたいによゝ

勇一「んで、俺に何をしろ　と！」

涼月「あらゝ私の話　聞いてなかったの？」

勇一「お前が何を話しているのか全然わかんない……いいいい！！！！いたい いたい いたい いたいってば！！その腕は曲がらないって！」

スバル「おい！勇一！奏お嬢様にお前呼ばわりするな！」

涼月「仕方がないわね、もう一度説明をするわ 要するに他の学年のクラスがあなたを大量出血をだせば高得点がもらえるわ」

勇一「それって俺を殺す気か！？」

涼月「それでは審査員の勇一君ということで始めるわよ」

勇一「俺のことは……無視かよ……」

こうして勇一は台の前で椅子に座らせて体と足を動かさないように縄で縛られた

勇一の隣には涼月奏が司会としていた

涼月「では始めるわよ、まず1年生達のクラス

A組・五更瑠璃

B組・中野 梓

C組・平沢優

D組・坂町 紅羽

2年A組・高坂桐乃

B組・姫路 瑞希

C組・佐倉 杏子

D組・芹沢 文乃

3年A組・槇島 沙織

B組・仲村ゆり

C組・巴マミ

D組・天川 涙子

です！」

涼月奏に指名された人は驚いたてた

涼月「まず 1年から

A組の五更瑠璃さん

B組の中野 梓さん

C組の平沢 優さん

D組の坂町紅羽さん

前に出て下さい」

梓と梓の友達平沢優と五更瑠璃と坂町紅羽が勇一の少し前来た

瑠璃「まったく、なぜあなたのような人種にコスプレなどと見せなくてはならないのかしら」

紅羽「私は近衛先輩がよかったな」

梓「なんでお兄ちゃんなんか」

憂「私、そこまで自信がないのに」

涼月「では体育委員の人達から衣装を受け取って、そしてカーテンの輪の中に入って」

女の子4人は体育委員から衣装を受け取り、カーテンの輪に入り体育委員が輪のカーテンをあげ4人の女の子全体を隠した。

涼月「では着替え終えた人は報告してね」

カーテンで見えなくなった女の子4人は着替えている頃……

勇一「あの……、涼月奏でさん」

涼月「何かしら、勇一君」

勇一「なんで俺なんすか？俺じゃなくても他のやつの方がいいんじゃないですか？」

涼月「あら、あなたは女の子のコスプレをまじかで見たくないのかしら？」

勇一「いや、確かに見たいのは見たいけど」

涼月「なら、いいんじゃない」

勇一「（俺の質問とは全然違う答えだし）」

そして5分後、カーテンの中でようやく着替え終えた人4人が言った



涼月「では行ってみよう♪最初はB組の中野 梓さん どうぞ!」  
にゃ〜体育委員の人は支えてた輪のカーテンを離し、着替え終えていた梓がいた

勇一「ブハアー!!」

あ! 勇一が鼻血を吹いて後ろに倒れた

梓「い／＼／＼いら／＼いらっしやい／＼ませ／＼／＼ご主人／＼様／＼／＼にゃ〜」

男子「おおー!!」

男子は梓の猫耳メイドに歓声をあげていた

勇一「くう……まだ……まだ終わらんよ……」

勇一が鼻血で倒れた時、近衛スバルが戻した

涼月「では2人目、坂町紅羽さん」

紅羽「はーい!お姉さま!じゃーんフリルガーターメイド!」

勇一「ブフウー!!」

またもや勇一が鼻血を吹いて後ろに倒れた、男子は歓声をあげた

涼月「あらあら〜勇一君も大変ね〜、コスプレ大会はまだ始まったばかりだと言うのに♪」

勇一「俺に……恨み……でも……あるのか!?!」

涼月「いゝえ、ただあなたの面白いところを見たくて、スバル またあげて」

スバル「はっ!お嬢様」

勇一はまた近衛スバルに起こされた

涼月奏は勇一のことを軽くスルーして次の進行を続けた

涼月「続いての3人目 平沢優さん」

憂「はい、私は 平沢唯・お姉ちゃんになりました！」

男子「おおー！！！」

男子ってコスプレの女子が好きなのかな

3年C組テント

唯「はっ！私がもう一人いるー！ということはドッペルゲンガー！！どーしよー濡ちゃん！！私 呪われて死んじゃうよ！！」

濡「唯！落ち着け！あれは憂ちゃんが変装しているんだ！！」

律「唯でもドッペルゲンガーのことを知ってるんだ」

涼月付近中央台

涼月「結構みんな威勢がいいわね……あら、勇一君 鼻血は出さないの？」

勇一「いや、似てるな〜って、すごく可愛いし、」

涼月「残念ね〜 あなたが鼻血を出さないと点数をあげることが出来ないのに〜」

勇一「俺だってそう簡単には出させませんから」

涼月「そう、なら別に構わないけど」

スバル「この変態者め！！」

涼月「では4人目 五更瑠璃さん」

最後の輪のカーテンが降りた時、五更瑠璃の服装がすごかった

瑠璃「……………あんまりジロジロ見ないでくれる」

服装は白いワンピースで真夏のイメージとした美少女に麦藁帽子

男子「おおー！！！」

勇一「か……可愛い／＼／＼」

涼月「全くだめね〜、実況の菊池君判定を」

家康「ん？……あ！はい！失礼しました！！！ え〜判定……です

よね、結果、勇一が鼻血を出したクラスはB組とD組、よってB組

とD組に500点を加算します。

え……コレより1年生のコスプレ大会を終了し、次は2年のコスプレ大会に移行します

途中結果は

1位D組3770点

2位B組3680点

3位C組3370点

4位A組3340点

です でも1年でこんなテンションだと2年3年に期待出来ます  
さすが3次元！中央台の涼月さんにお返しします」

涼月「はーい ありがとうね菊池君、では2年の部始めるわよ！」  
勇一「（菊池と涼月、どこで打ち合わせしたんだ？）」

T O b e c o n t i n u e d

#### 第4種目・コスプレ大会!?!前編(後書き)

今季も新しいアニメが出て来てまた新たに書きたいと思う小説が出て来て

大変です

今回はコスプレ大会後編です

## 第4種目・コスプレ大会!？ 後編(前書き)

どうも2次元です

本文が毎回長い文を作るので大変です  
けど仕上がってます

ぜひ読んでください

## 第4種目・コスプレ大会!？ 後編

「俺の姉妹達の憂鬱 15話」

家康「さあゝいよいよ2年のコスプレ大会の始まりだ!」

涼月「では2年生

A組高坂 桐乃さん

B組姫路 瑞希さん

C組佐倉 杏子さん

D組芹沢 文乃さん

前へどうぞ!」

桐乃「なんで勇一のために出なくてはなんないわけ!超ウザインですけど!」

瑞希「勇一君、私は他の女の子にも同じようにしているなんて少し悲しいです」

杏子「たくっ、なんで私がこいつのために着替えなくちゃならないわけ!?! さやかだったらいいのに」

文乃「全く 勇一にはあきれるわ、他の女子にデレデレしちゃって 勇一「(うわぁゝ4人の失言が俺の心をぐさぐさと刺さるなゝ)」

涼月「では2年のコスプレ大会始めるわよ!体育委員!」

体育委員の人が4人にカーテンの輪で全体を隠し、その4人が渡された服装を着替え始めた

そして5分後、さっきと同じようにした

涼月「では4人のみなさん、準備は出来ましたか?」

桐乃・姫路・杏子・文乃「はゝい」

涼月「では……………勇一君 覚悟は出来てるかしら?」

「……………ごくり、ああ、もちろん」

涼月奏は勇一のことをにやけて見ていた。

涼月 「では始めるわ、2年からB組 姫路 瑞希さん どうぞ！」

姫路瑞希のカーテンの輪が降りるとそこには

青のビキニ水着でビキニパンツにミニスカートがついている可愛い水着

姫路「あの………笑わないで………下さい」

男子「おおー！」

男子A 「可愛い!!」

男子B 「最高！！」

（姫路瑞希の水着はバカテスにつの1話にて）

「勇一……う！」

スバル「お前、吹き飛ばないんだなくてか鼻血出てるぞ」

「え？……！！な……なんじゃこりやあ！！」

スバル 「お前気づかなかったのか？」

勇一は自分の鼻血を見て驚いていた

「いや、今の今のままで気づかなかったんだ」

涼月「ふうくん、つまらないわね……」

では次、C組 佐倉 杏子さん

輪のカーテンが降りるとそこには

あるアニメの魔法少女戦士の服装であった

杏子「／＼／＼／＼／＼……ったく、なんであたしがこんなの着なきやならないわけ？」

男子「おおー!!」

男子A 「かつこいいい！」

男子G 「ベリーグッド！」

（服装はまどかマギカ変身後にて）

杏子「意外とこれ、恥ずかしいけど……………」

勇一「可愛いというよりかっこいい！」

涼月「全くだめね、全然女の子の魅力をわかってないわね」

勇一「え？うそ？」

スバル「奏お嬢様の言うとおりに、もっと女子の魅力に気づけ！」

勇一「2人に怒られてる」

涼月「では3人目、高坂 桐乃さん、どうぞ！」

輪のカーテンが降りると桐乃はノリノリでいた

桐乃「星くず・ういっぢ メルル はーじーまーるーよー!!」

勇一「な！なにー!!」

涼月「へえ、自らやるとは驚きだわ、ふふっ」

にゃ、桐乃お姉ちゃん、なんだか楽しそう

桐乃「それじゃ 星くず・ういっぢ メルル いっきまーす！」

（服装は俺妹の中のメルルの服装を桐乃が着ている）

勇一「あれ？こっちに向かってないか？」

桐乃「メテオ・インパク……………」

勇一「え？」

涼月「え？」

スバル「え？」

桐乃「トーーー!!」

勇一「ゴバァー!!!!」

桐乃お姉ちゃんはアニメコスプレの武器で走って勇一の左顔面を殴



り、勇一はそのまま殴った方に縛られたまま倒れた  
他の周りは啞然とした

桐乃「これで今のままの気が晴れたわ」

桐乃お姉ちゃんは今勇一を殴ったあとスッキリと顔で元の位置まで戻った

涼月「あらあら　勇一君はいろいろと大変ね」

勇一「俺の桐乃がコスプレをして俺を殴るなんてあるわけないよ……」  
「涙

3分後……

勇一は縛られたイスと共にスバルが立ち直させてくれた

涼月「気を改めて　2年ラスト　D組　芹沢　文乃さん」

文乃「べ……別にわ……私は、仕方なくし……してるんだからね！  
最後の輪のカーテンが降りるとそこは、

少しオレンジっぽいハワイ風の水着を着ていた

男子達「うひょ……最高……！」

男子D「可愛いぜ！」

勇一「ふ……文乃……！　ブハァっ、」

涼月「勇一君、鼻血ではなく口から出すのね♪」

勇一「これは違う！　ただの咳だ！」

スバル「全く　ややこしいやつだなお前は」

涼月「それじゃ、女子のコスプレに見とれてた菊池君」

家康「いやいや、俺は3次元には興味はない、……それはおいと

いて

2年のコスプレ大会が終了して結果に移ります  
結果的に勇一の反応見て

A組 1000点

B組 1000点

C組 900点

D組 1000点

となりますね」

涼月「このままいけば勇一君は……………あれね♪」

スバル「そうですね お嬢様」

勇一「誰のせいかな!!……………」

涼月「では引き続き 3年のコスプレ大会に移行するわよ♪」

涼月奏は勇一を無視してそのまま進行を進めた

涼月「では3年のコスプレ大会始めるわよ♪」

3年A組から

A組 牧島沙織さん

B組 中村ゆりさん

C組 巴マミさん

D組 天川涙子さん

前へどうぞ!」

沙織「いやはやゝ拙者が勇一氏の色気に参加とは……………困ったでござるな〜」

ゆり「まったく、行事じゃなかったら殺してるわ!」

マミ「あんまりこうゆうのはやりたくはないんだけど」

涙子「涼月奏っていう人、なにが目的でこんなことを始めたんだろ  
うか？」

4人はさっきいた人達の場所へ移動した

涼月「では3年の部 最後のコスプレ大会を始めるわよ！」  
にゃゝ勇一、どこまでやり続けるの？

それからまた5分後、輪のカーテンの中で着替える女子4人

涼月「それじゃ、まず3年の1番手 B組 仲村ゆりさん」

ゆり「なんで私がこんなチアガールなのよ！」

勇一「ブハアッ！……あのリーダー的な……ゆりが！セクシー過  
ぎる！」

（胸囲・腕・腹・太もも）

スバル「お前、鼻血出てるぞ！」

ゆり「あんた！変なことを考えたら殺すわよ！」

勇一「ヒィィっ！」

涼月「結構いいリアクションねゝ次 C組 バマミさん」

マミ「こうゆうのはやりたくはないんだけど……まあ勇一君のため  
に一肌脱いで見せますか！」

輪のカーテンが降りるとバマミの姿はなんだか大人っぽい  
白いビキニ水着、決めポーズを撮っていた

マミ「どうかしら？勇一君ゝ♪」

勇一「ブフウー！！！！ 出血が！！！！！！！！！！」

2年テントゝ

まどか「マミさん スタイルがよくて綺麗だなゝ……」

ほむら「まどかの方が100倍綺麗だわ」

まどか「ほ……ほむらちゃん!？」

さやか「ほむら、それは言い過ぎじゃないのか？」

杏子「そういうけど、さやかも綺麗だと思うぜ」

中央台付近

男子D「ステキー!」

男子E「最高ー!」

涼月「あらあら さすがは人気者ね」  
では次

D組 天川 涙子さん

涙子「なんで勇一に衣装を見せなきゃいけないのか、わからない」  
輪のカーテンが降りるとその姿は

とっても可愛いふりるメイド服

涙子「じゃーん! いらっしやいませ ご主人様♪」

勇一「ブハアッ!! あ……姉が…メイド服!」

涼月「勇一君 致命傷ね」

勇一「お……俺……死ぬ……かも……」

涼月「死ねばいいじゃない」

勇一「何!?!?!」

にゃ〜勇一 呪われてる

涼月「ではいいいよ 最後になりますね A組 牧島沙織さん」

沙織「ふっふっふーいいいよこの時が来たでござる!」

最後の輪のカーテンが降りるとその姿は

インデックスの格好したメガネなしの美人の牧島沙織

勇一「さ…沙織! ブハアッ!」

涼月「あらまた倒れた?」

スバル「何やってんだこのバカは」

沙織「あら、勇一君 私の衣装に見とれてしまったのかしら」

勇一「おいおい、メガネを取ったら美人過ぎるこのギャップ！反則じゃねーか！」

涼月「では実況の菊池君、点数を」

家康「了解！ 勇一は

死亡プラグが立っているので点数は

A・B・C・Dとも1500点を追加します

よって今回のコスプレ大会全総合点数は

A組 5840点

B組 6180点

C組 5770点

D組 6270点

となります。ここで午前の競技を終了したいと思います、次は昼休みなので1時間の休憩に入ります

午後からはA・Cでも逆転できる総合リレーがあるので、そこで頑張ってください」

あれから勇一は倒れたままである

勇一「はぁ、悲惨な回は終わったか……」

？「まだ終わってないわよ！」

勇一「え？」

俺の後ろに巨大な影……………

……………

勇一「き・桐乃！、ゆ・ゆり！、お・乙姫！

あ・・・あれ・・・なんで3人がここに？」

ゆり「決まってんじゃない！」

桐乃「お仕置きの時間だから」



## 第4種目・コスプレ大会!？ 後編（後書き）

最後は勇一への死刑ですね

前回と今回の登場作品

まよちき、俺妹、けいおん、まどマギ、バカテス、迷い猫、A B、  
とある科学 ですね

感想や意見など どんどんと書いてください  
待ってます

## **お昼休み（前書き）**

どうも 2次元です

今回はお昼時間中の休みの話です



## お昼休み

「俺の姉妹達の憂鬱 16話」

？「いて……きて……」

誰かが俺を呼んでる……

？「おきて……おきて……」

今後は体を揺さぶれながら俺を呼んでる

呼んでる声に答えないと

？「起きて勇一！………良かった、やっと起きてくれた」

俺を起こしてくれたのは4人兄姉の姉である涙ねえだった

勇一「あれ？涙ねえ……それに梓に希！どうしてここに？とゆうかここはどこ？」

希「ここは保健室」

梓「お兄ちゃんが気絶したから保健室まで送ったんだよ！」

勇一「そうだったんだ！ありがとう涙ねえ、梓、希………とところで桐乃は？」

涙子「桐乃ちゃんは友達と一緒にお昼ご飯食べてると思うよ」

勇一「お昼ご飯………って涙ねえ！？今何時！？」

涙子「え！………今は12時30分だけど？」

ということとは 俺は約40分くらい寝ていたのか………！！あの時の終わりが11時50分だから………なんてことだ！！

梓「よくわからないけど私、お昼ご飯食べに行くから」

勇一「え？」

梓「私も軽音部の人達とお昼の約束誘われてるから」

勇一「梓も!？」

希「私も巧達と食べに行く」

勇一「希まで」

涙ねえと梓と希は俺を後にし、保健室から出た  
俺は仕方なく保健室を出た

勇一「さて、俺はお昼どうしようか」

俺が考えていると左から声が聞こえた

? 「勇一様」

勇一「ん? ……あ! 乙姫!、どうしてここに？」

乙姫「たまたま通りかかったんで来ちゃいました」

勇一「そうかい、」

乙姫「勇一様、お昼ご飯はどうなさいます？」

勇一「そうだな、久々に2人で昼飯するか」

乙姫「え? えー!?!?!」

というわけで俺と乙姫は校舎の屋上で昼飯をすることにした、  
よくわからないが乙姫の顔が少し火照ってるみたい

勇一「ん、空気がおいしい」

乙姫「ここ勇一様のお気に入り場所ですよね？」

勇一「おう! よく知ってるな」

乙姫「だって勇一様、お昼ご飯食べる時いつもここに誘っているじゃないですか」

勇一「あ! わかっちゃった!？」

乙姫「わかりますって…」笑

こうして俺と乙姫は俺のお気に入りである屋上で昼飯をした。

勇一「乙姫! このお弁当 うまっすよ」

乙姫「良かった、勇一様の口にあって、今朝作ったかいがあまし

た！」

勇一「今朝！乙姫が！」

乙姫「はい！！ 勇一様のために」

こりゃたまげた！俺のために作ってくれるとは俺も愛された男かな

勇一「まあ姉貴達よりかはまだまだ だけど」

乙姫「勇一様！それはどうゆう意味ですの！？」怒

勇一「（笑）ごめんごめん、でも俺のために作ってくれるなんて嫁にしたいわ」

乙姫「え！それはどうゆうこと！勇一様！？」興奮

勇一「例えばの話しだって！！」

乙姫はいきなり俺の目の前に接近した

乙姫「もう勇一様、どっちかにして欲しいですわ！」

勇一「いやゝごめんごめん」

乙姫「勇一様のバカ……」

勇一「それにしても乙姫と2人っきりで食べるなんて去年以来だな」

乙姫「そうですね、あの頃は私たち、お互いに気づかずだったんですわね」

勇一「けど2カ月ほど経った時、ようやく思い出したんだ、まさか幼なじみの乙姫とは」

乙姫「勇一様、すぐ気づかすかなかったなんて酷いですわ」

勇一「あはは……俺もびっくりしたよ2カ月で思い出したなんて、酷いと思ってる ごめんなさい」

乙姫「いいんですわ、それは過去のことですし、そんな勇一様でもわたくしは好きですわ」

勇一「そ……その、ありがとう」

なんだかんだ言ってやはり乙姫は俺のことが好きなんだ

10分後

勇一「さて俺の弁当と乙姫の弁当を食ったことだしそろそろ戻るか」

乙姫「そうですね」

弁当を片づけて屋上から自分達の教室に向った

その途中、廊下でさやかと杏子が話しながら歩いてた

勇一「お！さやかに杏子！」

さやか「勇一」

杏子「勇一」

勇一「2人してなにしてたんだ？」

さやか「杏子と昼飯食ってた」

勇一「へー そうなんだ、しかし杏子はなんでさやかにくっついてんだ？」

杏子「い！……いいだろ！」

さやか「杏子がどうしてもくっつきたいっていうから」

杏子「さやか！言うなって、恥ずかしいじゃんか！」

乙姫「ふふふ…（笑）お二人さんって仲いいんですね」

杏子「ふふん！まーな！」

なんか妙に偉そう

勇一「まっいつか、それじゃなくさやか、杏子」

さやか「じゃあね」

杏子「またな」

話を終えた後、さやかと杏子は俺と乙姫を通り過ぎて行った

勇一「そをじゃ、俺達も行きますか」

乙姫「そうですね」

そして俺達も向かう場所へ移動した

## お昼休み（後書き）

まあ のんびりとした回です  
次回は最後の競技になります

## 迷い子と母親（前書き）

ちよつとした時間に投稿しました  
天川家の親に関する少しだけの話

## 迷い子と母親

「俺の姉妹達の憂鬱 17話」

俺達は自分達の教室に来た、そして弁当袋を机の横に引っ掛けて教室を後にした

廊下にて

勇一「さてテントに戻ろうか」

乙姫「そうですね……あれ？」

勇一「どうした？」

乙姫「あれは、迷子でしょうか？」

俺達より7M離れたところに人形を抱えた幼稚園児の子がいた

勇一「行ってみようか？」

乙姫「そうですね」

俺と乙姫は人形を抱えた困った顔をした幼稚園児の子へ近くまで行った

勇一「どうしたのお嬢ちゃん」

子「お母さんと……はぐれた……なので」

乙姫「そう、可哀想 私達がお母さんを探してあげますわ」

子「ほ……ホント!？」

乙姫「ええ、良いですわよね勇一様、まだ時間がありますよね？」

勇一「まあ 確かにあるけど」

乙姫「わかりました。名前はなんて言うの？」

子「楓、」

乙姫「楓ちゃんか、可愛い名前ね」

勇一「この人形にも名前あるの？」

楓「うん、この子はお菓子の魔女でアステロツテちゃん、」

勇一「へ、へゝ可愛い…ね」

ちよつと人形が奇妙な気がする

こうして迷子の楓ちゃんの親を探すため楓ちゃんを連れて探しに行った

昼の競技まであと25分ゝ

勇一「校舎付近にはいないなゝ」

乙姫「では別の場所に行ってみましょうか」

昼の場所まであと20分ゝ

乙姫「保護者用のテント付近には探してる親はいませんねゝ」

勇一「そうだねゝ、早く見つかるといいけど」悲

乙姫「勇一様？」

勇一「楓ちゃん、お母さんとはぐれた場所は知ってる？」

楓「うん、多分……あっち…なので…」

楓ちゃんは早歩きではぐれた場所へ移動した

俺と乙姫も付いて行った

昼の競技まであと17分ゝ

楓「ここで……お母さんと……はぐれた…なので…」

勇一「C校舎付近かゝ」

乙姫「やはりいませんね、どこにいるのかしら」

とその時、スピーカーから放送部の声が聞こえた

「放送部からのお知らせです 迷子の楓ちゃん、迷子の楓ちゃん、



お母さんは放送部室にいるから近くの人に連れて来て下さい」  
そしてスピーカーからの声は聞こえなくなった

勇一「お母さん 見つかったって」

楓「ほ……ホント!？」

乙姫「ええ、今からお母さんのところへ行きましょう。」

俺と乙姫は放送部室に親がいることを知り、

楓ちゃんを連れて行った

昼の競技まであと13分

放送部室、

母「ありがとうございます。うちの子を見つけてくれて」

勇一「いえいえ、たまたま迷子の楓ちゃんがいたもんですから、母親とはぐれるのは寂しいですし、ほっとけなかったです」

乙姫「勇一様……」

母親「このたびのお礼はなんとしたらよいか」

勇一「別にお礼だなんてそんな……」

母親「お礼としてこれを貰って下さい

俺は楓ちゃんの母親から袋を渡され、それを受け取った

母親「本当に楓ちゃんを連れて来てくれてありがとうございます。

では」

楓「お姉ちゃん、お兄ちゃん、……ありがとうございます……バイバイなので・  
……」

俺と乙姫は母親と楓ちゃんに手を振ってお別れをした。

乙姫「良かったですね勇一様」

勇一「そうだね、母親か」

乙姫「勇一様? どうかありませんか?」

勇一「え！いや！別に！さ…さあ、早く各自のテントに戻らなきゃ遅れるぞ！！……」

乙姫「勇一様、何か悩んでますわね」

俺はさっきの楓ちゃんと母親がうらやましかった。俺達天川家には父さんと母さんがいない、生まれた時から親戚が育ててくれた恩人、けど親戚はある病気で俺達中学の時亡くなった、親戚は亡くなる前、この家を使ってもいいと俺達のために譲った。それから俺達が親戚の家を使ってる

親がいる家族ってどうゆう気持ちか俺達にはまだわからない。

いずれにしても俺達の親は本当にいないわけじゃない、何等かの理由があって戻ってこないのかもしれない

だから必ず、父さんと母さんは帰ってくるというまでも信じてる、いつでも迎えられるように待っている

と俺達、涙ねえと桐乃と梓と俺はずっとここにそう思っている  
昼の競技まであと10分

## 迷い子と母親（後書き）

実際問題は最後H P P Y E N Dで閉めたいですけど  
もうそろそろ本当の真実が明かされる時が来そうなので  
体育祭編が終わればラストスパートです  
感想等あれば書いてください

## 第5種目・総合リレー（前書き）

いやゝ 長く待たせました  
リレーで伝えられるか不安です  
つたわらなかったらごめんなさい

## 第5種目・総合リレー

「俺の姉妹達の憂鬱 18話」

家康「さあ昼の休憩は終わり、いよいよ最後競技となります  
それは

クラス対抗総合リレー！！

全学年の皆さん、最後の競技なので頑張って行きましょう！」

B組テント」

西村「お前ら、わかってるな！！ 悔いのない記念にしろよ！」  
B組一堂「はい！！」

西村「では総合リレーの出場選抜を伝える、男子から

1番 上条当麻！

2番 織斑一夏！

3番 高坂京介！」

一夏・当麻・京介「「はい！！」」「

西村「

4番 坂町近次郎！

5番 音無結弦！

6番 吉井明久！」

近次郎・結弦・昭久「「はい！！」」「

西村「そして

7番アンカー 天川勇一！」

勇一「はい！！」

西村「次、女子

1番 吹寄制理！

2番 篠ノ之箒！

3番 五更瑠璃！」

吹寄・箒・瑠璃「「はい!!」」

西村「

4番 近衛スバル!

5番 ユイ!

6番 島田美波!

スバル・ユイ・美波「「はい」」

西村「7番アンカー 竜宮乙姫!」

乙姫「はい!!」

鉄人……………もとい西村がマジで決めた選抜チーム

西村「選ばれた14名!はしっかりと全力を出せ!

特に吹寄と天川は必ず気をつけること!

吹寄!お前は1年アンカーからバトンを素早く取り、流れを変えるんだ!」

吹寄「はい!西村先生!」

西村「そして天川

お前はアンカーとして最後まで責任を持って3年へ繋げ!いいな!」

天川「はい!!西村先生!」

西村「残りは応援をしてくれ」

B組一堂「はい!!」

いよいよ最後の競技 全力で優勝をねらうぜ!

家康「さあ いよいよ最後の競技 総合リレーの始まりです!

では 総合リレーの出場者の皆さん 入場してください」

1年のA組、B組、C組、D組が入り男子7名女子7名、計14名で各14人ずつ出て、1年の後列の後ろに2年のA組、D組になり、さらに後列に3年が並ぶ。そして途中で男子と女子にわかれ、前スタートラインに男子1年、3年のA組、D組が並び、後ろスタートラインに女子1年、3年のA組、D組がならんだ

そして先頭の1年男子と女子がスタートラインの1番手についた家康「では長い長い総合リレーの幕開けです。皆さん盛大に応援してください」

土屋「……では 位地について よーい」

土屋「……ドン！」

1年の男子達がバトンを持って1番を目指して走った、そして半分走り次に女子にバトン渡し、もう半分の走る。そしてまた男子にバトンを渡す

と その繰り返し

状況を見るとCが1番、Aが2番、Dが3番、Bが4番という順位になっている

1年のリレーが終わるころには

C・1位

A・2位

B・3位

D・4位

となっていた

そして1年最後の女子が当麻にバトンを渡され4位になったけど、当麻は勢いをつけ走った

当麻「うおー！！」

当麻の勢いは止まらない速さで走り、3位になり、そのままの順位で吹寄にバトンを渡した

当麻「吹寄！まかせた！」

吹寄「わかったわ 上条当麻」

吹寄の走り方は………男子の視線が吹寄を集中している（いやらしい目で）

それは 吹寄の走り方は、胸が大きく揺れている………ブフ

ッ！

吹寄自信は真面目に走ってるつもり……………です

吹寄「織斑ー」

一夏「よし、まかせた」

吹寄は織斑にバトンを渡す

一夏「行くぞ！ー」

織斑はバトンを持って素早く走った

ラウラ「一夏！頑張れ！そして私の婿になるんだ！」

箒「な！一夏は渡さないんだから！」

ラウラの言葉で箒がつかかってきた、婿って……………おい…………

一夏「いい加減に止めてくれよ」

一夏ってある意味ハーレム？

一夏「はあ……………はあ……………箒……………」

箒「一夏！」

一夏「次！……………頼む」

箒「まかせろ！」

一夏は箒にバトンを渡した

箒「一夏が頑張ってくれたこのバトンを必ず繋げてみせる！」

箒が一生懸命走っていると後ろから追いかける女子・鈴がいた

鈴「あんたにいいかつこはさせないわよ！」

箒「鈴！」

箒対鈴の対決 2人の勢いは早く、2位と3位の争いになってる  
そして次、箒が渡す男子は京介



箒「高坂！」

京介「よし、まかせた」

箒はリードした京介にバトンを渡し、京介は走った

鈴と箒の競争は鈴が早く次の同じ組の男子にバトンを渡した  
よって勝負は鈴の勝ちになる

鈴「あんた……少しは…痩せたら」

箒「な！そういう鈴こそ痩せた方がいいぞ」

鈴「う……うっさいわね！」

あゝあゝなんかケンカらしきなってる

真奈実「きょうちゃん頑張れ」

沙織「京介氏 ガンバでござる」

京介「うおおー！」

赤城「高ー坂ー！お前ばかり応ー援ー！はずるいぞ！」

赤城が京介の後を走ってきた

京介「知るか！そんなの！」

京介は全力で走り、赤城も全力だった

京介「黒猫ー！」

五更「兄さん、少しは冷静に」

黒猫は少しずつリードしてバトンを受け取る準備をしていた

そして黒猫はバトンをもらい、走る。少しずつ走るが次々と抜かさ  
れていく

結局4位になったけど最後まで頑張っていた

五更「さあ…早く」

近次郎「わ……わ……わかった…」

近次郎……黒猫が近くと避けてたような気がする……まあバトンを

取ったし大丈夫だろ

近次郎「あ…あ…つぶねー 危うく鼻血が出るところだった」

近次郎は鼻をバトンを持ってない方で押さえた

黒猫の遅れをとるため近次郎はいつもより早く走る

近次郎「近衛！」

スバル「次郎！早く！」

次郎はスバルにバトンを渡す。渡されたスバルは全力で走る  
そのスピードはもう女子ではなくプロ並みの速さ

勇一「早！凄すぎだろ！！」

他のみんなも同じような顔をしている

スバルの速さで遅れた距離が縮まり再び3位になり、次の走者にバトンを渡した

スバル「はい！これ！」

音無「お！…：…おう！」

音無しが動揺していたが気にせずそのまま走った。

日向「音無！ファイト！」

かなで「結弦 頑張れ！」

音無を応援する日向やかなでやSSSのメンバーなどがいた

音無「ユイー！」

ユイ「音無ーこっちこっち！」

音無がユイにバトンを渡すとユイが全力で走る！

ユイ「オッシャー！！行くぜー！」

これまたびっくり！ユイもプロ並みの速さ……いや、あれはバカ

走りだ！

けど凄い！3位から2位に逆転した！しかも1位に近づいてるし

ユイ「オーリヤー！次！吉井！」

明久「ん？うわぁ！ユイ！ちよっと早井って！」

ユイ「お前が遅いんだよ！」

明久がユイに抜かされそうな時、バトンを渡し明久に勢いをつけさせた

ユイ「こうすれば早くなるでしょ！！」

ユイは明久の後ろへ走り弱めた。そして飛び蹴りで明久の背中を蹴り飛ばした

明久「うわぁー！」

明久は勢いをつけ、そのまま走る！

明久「けど この勢いなら……行ける！」

明久は勢いにのせ、走り続けた。けど1位から少しずつ引き離されている

明久「くそっ、こうなったら美波に頼むしか

美波！」

美波「アキー！」

明久「美波！次を頼む 美波なら体積関係なく早くびれがー！ー！  
！」

美波「アキは余計なことを言わない！  
後はうちにまかせて」

明久を首しめをした後すぐさまリレーに戻った

美波の次がいよいよ俺かー、緊張する

美波「天川！」

勇一「ほい来た、」

俺は美波からバトンを受け取り全速力で走った

今のところ 2位を維持状態

よし！1位との差を縮めた

乙姫「勇一様！こっちですわ！」

勇一「よし、乙姫頼む」

ふう〜結構頑張ったかな、乙姫は頑張っている

ちよつと遅くはなっているけど

乙姫はようやく3年生男子にバトンを渡し、乙姫もようやく走りを終えた。

後は3年生次第となる3年生の走りは鮮やかな感じを捉えいたぬかされたりぬいたり

攻防戦になったがとても最高のリレーと感じた

結果は

1位 C

2位 B

3位 D

4位 A

となった

ポイントは

1位 3500

2位 3000

3位 2700

4位 2500

となり

Cに3500

Bに3000

Dに2700

Aに2500を加算した

そしてこの体育祭も幕が終わろとする

## 第5種目・総合リレー（後書き）

今回は 体育祭の閉会式となります  
これedyやく終われそうです  
感想等ください

## 体育祭・閉会式（前書き）

体育祭編を終わらせることが出来ました

## 体育祭・閉会式

「俺の姉妹達の憂鬱 19話」

シャモ「これより 閉会式なの ごく、ごく、ごく、ぷはあー」

西村「シャモ校長 ビールを飲むのはどうかと思いますが」

シャモ「んゝ落ち着かないなのゝ」

このシャモ校長はまったりとのんびりとした人だなく ていうか早くやれよ！

シャモ「これは 失敬

では結果発表なの

全種目による各組のポイント結果

4位8340点、A組なのゝ

最初は突っ走っていたがだんだんと疲れが出てしまったなの けどここまでの戦いよく頑張ったなのゝ」

先生や生徒、一般人の人達は拍手をした

シャモ「続いて 3位は8970点、D組なの

最後の最後まであきらめないことで自分達への成長なのかもしれないその勇気があったから4位から3位に上がったなのゝ」

一同拍手

シャモ「では2位 9180点B組なの

B組は少しづつ頑張っていたその結果、惜しくも2位だがよく頑張った お見事なのゝ」

拍手

シャモ「そして1位9270点C組

このクラスも最後まであきらめないことで



1位を取った栄光のクラスなの」  
拍手

シャモ「では表彰なの」  
1位C組 代表者なの」

C代表者男子「はい」

シャモ校長は優勝国旗をC組代表者男子に授与

C組代表者男子は優勝国旗を受け取り、シャモ校長に礼をして自分の場所へ戻って行った

シャモ「うむ、これにより第10回 THE WorldX高等学校  
園 球技体育祭を終了なの」

西村「閉会の礼を！礼！」

生徒一同「ありがとうございました！！」

生徒の礼により体育祭は終わった

今年は優勝出来なかったけどとても良かったって俺は思う  
来年こそは優勝を目指す！

天川家

涙子「いやーホント楽しかったね体育祭」

梓「はい！ お兄ちゃんの頑張りが見られて良かったです」

希「勇一 頑張ってた」

勇一「なんか照れるな」

桐乃「このシスロリコン！バツカじゃないの！」

う！なぜにそう言われ方なんだ！？

涙子「まあまあ、そろそろ晩御飯の時間だから勇一、梓、希は休んでて

私と桐乃ちゃんで作るから」

桐乃「涙ねえ、ちょっとハードじゃない？」

涙子「そうかな… まっ おいしいものを食べて湯上がりしてぐっすり眠れば最高だと思うけど」

涙ねえは元気だなゝ

勇一「それじゃお言葉に甘えてそうさせてもらおうよ」

俺と梓と希は少し部屋でくつろぎ、そして晩御飯が出来上がって食って

湯船につかり、今日という日を過ごして就寝した

## 体育祭・閉会式（後書き）

次回はまた日常に戻ります  
もうすぐで終わりが近づこうとしていますので頑張ります

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0458s/>

---

俺の姉妹達の憂鬱

2011年11月29日13時56分発行